墨川亭雪麿自筆稿本『絵本仮名手本忠臣蔵』

――翻刻と解題――

神林尚子*

Ⅰ　解題

一　伝来と概要

ここに掲出する『絵本仮名手本忠臣蔵』は、明星大学所蔵の墨川亭雪麿自筆稿本である。全三〇丁の中本形態で、天保四年の序年記を備える。版本は伝存せず、出版されずに終わったものと推定される。

表紙貼紙の印記より、本書は林若樹の旧蔵書であったことが知られる。[1] 林若樹の筆になる「余の蔵する近世名家の草稿[2]」には、他三点の書目と並んで「絵本仮名手本忠臣蔵　黒川（ママ）亭雪麿稿　一冊」が挙げられ、「右刊本ありや知らず、版下のごとし」とある。蔵書の散逸に伴って本書の所在は不明となっていたが、このほど新たに市場に現れ、明星大学の所蔵するところとなった。本稿は、この稿本を影印とともに翻刻し、形態的特徴を中心に若干の解題を付すものである。

本書の概略を示すものとして、まず表紙の記述を次に引用する。

天保四癸巳仲春　山本平吉板
絵本仮名手本忠臣蔵（えほんかなでほんちうしんぐら）
墨付※全巻※三十張　墨川亭雪麿修辞／香蝶楼国貞画図

書名（打付）には朱筆でルビが付され、「全巻」の文字を見セケチにて「墨付」と訂している。板元・画工の名も明記されているほか、表紙には「地本行事」の黒色印も二顆みられ、[3] 地本行事の検閲を受ける段階まで、出版に向けて準備が進められていたことが窺える。

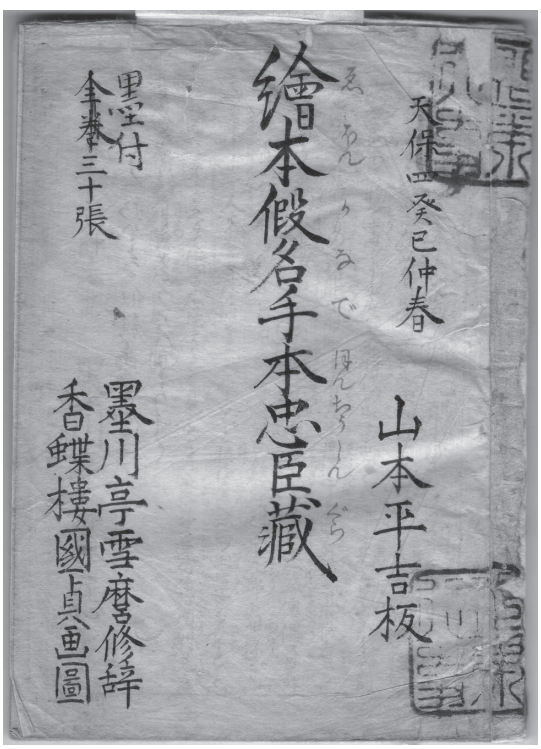

図1　『絵本仮名手本忠臣蔵』表紙

神林尚子　＊　日本文化学科　非常勤講師　日本近世文学・日本近代文学

現存する他の墨川亭雪麿の稿本との比較から、本書も雪麿の自筆本とみてよいと思われる。[4] 雪麿の事蹟および著作書目については、佐藤至子氏による研究が備わるが、[5] 本稿ではこの先行研究を参照しつつ、明星大学蔵『絵本仮名手本忠臣蔵』の位置づけを試みたい。

本書には、随所に貼紙等による訂正がみられるものの、総じて本文に大きな推敲の跡はみえず、清書本にあたるものと考えられる。筆耕の経験もある雪麿の筆跡は明瞭で読みやすく、画工への絵組の指示として描かれた挿絵も、略筆ながら手慣れた筆致である。[6] 見返しには画工への指示が見られるほか、十五丁裏には貼紙および本文中の書入れにて、十五丁で「とぢ分」になるため、「爰にて書切候よう」との指示がある（後掲の図版18を参照）。これを筆耕への指示ととるならば、筆耕・画工の手にわたる直前の段階の最終稿本と位置づけられよう。あるいは彫工に対する指示と解しうるならば、本書の本文相当部分は版下としての使用を想定していた可能性もある。傍行に文字を補入する箇所なども散見され、本書の本文部分をそのまま版下として使用しえたか否かは疑問も残るが、彫工の技量によってはその程度の調整は可能であったものか。本書が薄手の料紙を用いている点も、後者の可能性に資するものとも考えられるが、詳しい検討は後考を俟ちたい。

二　『絵本仮名手本忠臣蔵』の位置づけ

本書の形態および内容は、従来の文学史の定義からは異例に属する。また、執筆の背景や刊行されずに終わった理由などについても、なお不明の点も残っている。詳細は今後の課題であるが、ここでは問題の所在を指摘するとともに、若干の考察を試みたい。

（一）　形態的特徴と分類

本書の構成は全三〇丁、うち一〇丁が本文、二〇丁が挿絵に相当する。本文は墨筆、漢字仮名交じりの細字（半丁一三行、ほぼ総ルビ）で、本文と挿絵の丁は互いに独立している。また、内容は浄瑠璃『仮名手本忠臣蔵』の詞章のほぼ忠実な抄録となっている。

従来の文学史では、本書のような形態・内容を備えた作例に対する定義をみない。書型は中本ではあるが、本文と挿絵が同丁に混在する草双紙（合巻）とは相違しており、また内容面から、中本型読本の分類にも適さない。先行作の抄録という点では、安政期を中心に盛行する切附本ともやや近似するが、本書の執筆の時点では切附本の作例・様式ともいまだ定着しておらず、それを意図しての執筆とは無論考え難い。[7]

文学研究上は明確なジャンル区分の用語を持たないものの、こうした形態の作品は本書以外にも板行されている。幕末にかけて相当数が刊行されたことが想定されるが、ジャンルとしての対象化や網羅的な調査はいまだ行われておらず、まずは伝本の探求と書目の整理から始めねばならない。内容・形態の両面からその特徴を検討した上で、この種の板本をジャンルとして把握し、当時の出版界における位置づけを検討していく必要があると考える。

（二）　執筆の背景

形態的特徴とジャンルの問題とあわせて、本作の執筆の背景と、墨川亭雪麿の著作活動の中における位置づけにおいても一考したい。

稿本の表紙・序文の年記から、『絵本仮名手本忠臣蔵』は天保四年春の刊行を企図されていたことが知られる。雪麿は文政期から合巻を中心

として著作活動を始めているが、天保四年には、後述する『忠臣蔵替伊呂波』など数点の合巻作品に加えて、人情本や地誌の作例も上梓している。[8] 以後、天保七年には読本の作例も発表しているが、これらを少数の例外として、雪麿の作例はほぼ合巻を専らとする結果となった。

雪麿の著作活動を総じて評するならば、彼の資質や好尚は合巻の著述に最もよく合致していたと言えようが、それはおそらく、天保四年前後の他ジャンルの作例を経て、結果的に選び取られた行き方であったとも考えられる。これら少数の例外は、幅広い作例を手がけようとした雪麿自身の意志によるものか、書肆などの薦めによるものかは不明であるが、後者だとすれば、雪麿がこの時期までにある程度戯作者としての知名度を確立していた証左でもあろう。未刊に終わったとはいえ、『絵本仮名手本忠臣蔵』は、雪麿の模索期を示す作品の一つとしても注目すべき作例である。

本作の特徴をより明らかにするために、同時期に執筆された雪麿作の合巻『忠臣蔵替伊呂波』（歌川国貞画、蔦屋吉蔵板）と比較しておこう。『忠臣蔵替伊呂波』は天保四年春に初編が出来、以後天保一三年まで、全九編にわたって刊行されている。内容としては「忠臣蔵」を基本としながら独自の人物や逸話を取り交ぜており、初編口絵には「絵兄弟」の趣向を用いるなど、細かい作意も窺える。また、登場人物は全て役者似顔絵で描かれているが、現存する五・八・九編の稿本[9]には、作中人物のそれぞれについて、対応する役者名が雪麿自身の筆で克明に指示されている。

一方、『絵本仮名手本忠臣蔵』の見返しには、「すべて人形ハみな似顔にて御認／もつとも役わりハ御見つくろひよろしく」との朱筆書入れがみえる。役者似顔絵の使用を指定してはいるものの、具体的な役者の配役については適宜「御見つくろひ」との指示に留まることは、合巻『忠臣蔵替伊呂波』稿本にみられる緻密な指示とは明確に相違している。

これはまた、『絵本仮名手本忠臣蔵』と実際の歌舞伎上演との関係の希薄さを示すものでもあろう。同時代には、歌舞伎上演を紙上に再現した「正本写」合巻の作品群も登場しているが、[10] 本作は、これら正本写合巻とも異質なものとして構想されていたと言うことができる。

内容・形態の両面を含めて、本作は同時代の合巻の常道とも、また歌舞伎上演と密接に関連する正本写の作例とも一線を画すものであった。本文と挿絵が別丁に独立し、また本文が浄瑠璃の抄録にとどまるという特徴は、本作の執筆が、合巻などに比してより簡便な、作者の関与の度が少ないものであったことを想像させる。詳しい事情は不明であるが、あるいは本作は、雪麿の側からの発案というより、書肆の依頼をうけて執筆されたものと想定すべきかとも思われる。

では、『絵本仮名手本忠臣蔵』はなぜ板行されずに終わったのだろうか。一つの可能性としては、先述の合巻『忠臣蔵替伊呂波』との兼ね合いが考えられる。板元は異なるものの、同時期に、同じ「忠臣蔵」の題材を扱う作品を刊行することは得策ではないという判断が働いたものか。

別の推論としては、本作の構想や題材など作品に関わる理由ではなく、書肆の事情などの外的要因によるものであったとも考えられる。作者というより書肆主導の企画であったとすれば、書肆の事情によって刊行が途絶したとしても、ある程度不可避的であったとも言えようか。いずれも推測の域を出ないが、本作の板元として予定されていた山本平吉の動向を含めて、更に考察を進める必要がある。

最後に本書の基本書誌を掲げて小考を終えたい。

【書誌】

体裁　中本一冊。縦一七・四糎、横一二・六糎

表紙　共紙表紙

外題　「絵本仮名手本忠臣蔵」（打付）

年記　天保四年癸巳仲春（表紙・序年記による）

紙数　全三〇丁（本文一〇丁、挿絵二〇丁。表紙・後表紙を除く）

印記　朱方印「林若吉印」（林若樹）

備考　墨川亭雪麿自筆稿本。表紙に「山本平吉板」「香蝶楼国貞画図」とあり。墨筆、（随所に朱筆にて書入れ）。貼紙訂正あり。

注

（1）三村清三郎「林君の蔵書印」（『林若樹集』日本書誌学大系第二八巻、青裳堂書店、一九八三年）には当該の蔵書印は掲出されていないが、印文「林若吉印」より、林若樹の本名を図案化した印記とみて良いと考えられる。

（2）『集古』戊寅五号（昭和一三年一一月）初出。前掲『林若樹集』所収。

（3）「地本行事」の黒色印については、石井研堂『錦絵の改印の考證』（鈴木重三・木村八重子補記補注、芸艸堂、一九九四年。昭和七年四月の増訂再版本を底本とする）の本文および補註にも、この印記を持つ幕末の稿本の例が複数紹介されている。行事捺印の制度上の詳細は不明であるが、地本行事の検閲を受けた証左であることはほぼ疑いないものと思われる。

（4）国文学研究資料館に所蔵される墨川亭雪麿作の合巻『忠臣蔵替伊呂波』五・八・九編の自筆草稿本を参照した。

（5）「墨川亭雪麿と戯作」「墨川亭雪麿活動年譜稿」。ともに氏の著書『江戸の絵入小説――合巻の世界』（ぺりかん社、二〇〇一年）所収。

（6）木村黙老編『戯作者考補遺』に、式亭三馬作の読本『梅精奇談魁草紙』（文政八年刊）の筆耕を雪麿が務めていたという記述がみえる。なお同書には、雪麿の文筆活動の初期において、浮世絵師墨亭月麿に師事していた旨も記される（ともに注5の佐藤氏論考に指摘あり）。

（7）中本型読本・切附本については、高木元氏の『江戸読本の研究――十九世紀小説様式攷』（ぺりかん社、一九九五年）などの研究を参照。なお切附本との関連については、表紙の作者表記に「修辞」の語が用いられていることにも留意したい。他の雪麿の作例では、近松浄瑠璃『国姓爺合戦』に基づいた合巻『絵本国姓爺合戦』にも、作者名義として「縮綴」の語がみえる。先行作の模倣の度が高いものに対して「修辞」や「縮綴」などの語を用いる意識が存在していたとすれば、後の切附本や抄録物合巻の展開とも関わって注意を要する。

（8）佐藤氏の前掲論文（注5）によれば、本書以外に現在確認される雪麿の著作は、読本と人情本各一点（戯作以外では、このほか地誌一点）を除いて、全て合巻である。

（9）注4に既述。

（10）正本写については、渥美清太郎氏「歌舞伎小説解題」（『早稲田文学』一九二七年一〇月）、鈴木重三氏「後期草双紙における演劇趣味の検討」（『国語と国文学』一九五八年一〇月）のほか、佐藤悟氏編・解題『正本写合巻年表』（国立劇場調査養成部、二〇一一年）などの研究が備わる。

Ⅱ　翻字

【凡例】

一、表記は原則として原文に従った。仮名遣いや清濁等は原文の通りとしたが、漢字は通行の字体に改めた。また合字は仮名に開いた。

一、片仮名の「ハ」は原文のまま残した。

一、句読点・おどり字は原文の通りとした。

一、行移りは追い込みとしたが、段の変わり目に改行を施した。

一、丁移りは」で示し、（　）内に丁付を示した。

一、原本には虫損箇所が散見する。虫損による欠損のうち、残存の字画から文字が推定できる場合は〔　〕で示した。欠字は□で示し、前後の文脈等から文字を推定できる場合は傍行の〔　〕内に注記した。

一、誤字や誤記とみられる箇所には、傍行に〔ママ〕と注記した。

一、捨て仮名は小字で示した。

一、貼紙による訂正箇所は［　］で示した。

一、見セケチによる訂正箇所は〈 〉で示し、訂正前の文字が判読できる場合は、当該の文字を※～※で囲んで示した。
一、傍行に文字が補入されている箇所は《 》で囲んで示した。
一、句点の見セケチは〈。〉にて示した。
一、朱字の書入れがみられる箇所は、適宜＊を付して注記し、書入れを「」内に転記した。なお転記の際の行移りは「／」にて示した。
一、翻刻に際し、本文・挿絵ともに通し番号を付し、【 】で示した。

【表紙】
天保四癸巳仲春　山本平吉板
絵本仮名手本忠臣蔵（＊ルビ朱筆）
〈墨付〉※全巻※三十張　墨川亭雪麿修辞／香蝶楼国貞画図
【表紙貼紙】
墨川亭雪麿編　天保四癸巳年（朱筆）卅七
絵本仮名手本忠臣蔵草稿［朱方印・「林若吉印」］
【見返し】
＊朱筆書入れ「すべて人形ハみな似顔にて御認／もつとも役わりハ御見つくろひよろしく」
【序】
そも絵冊子の案といつぱ。医師の配剤するに似て。上手も下手も一本の。匕と筆との頭に在。此節時好のお当と。軽く見たなら看官の。腹を採て弱な。色ある物を書がよし。唐土の時代の堅すぎて。お通じが无と見ば。どうでも瀉薬の滑稽たものに。功能ハ有ぬべし。有左ども偶中あれば。精気盛の看官へ。すてんぽうな独参湯。忠臣蔵の探薬も。これ書賈の刀圭加減。傀儡哥舞妓でよく流行る。狂言なりとのお見立ハ。当合点の鉄砲場。定九郎にハ非ねども。その発市に配人の。背骨をかけてどつさりと。抜る金銀二ツ玉。運とも幸ともいふ様なく。无言かへりて儲るハ。心地よくこそ見えにけり。是こそ運の強湯剤。見立違にあらずして。利験が知たハお手柄〳〵。

天保四癸巳仲春望　六花堂のあるじ　墨川亭雪麿誌［印・丸に「雪」］

＊印記は貼紙。「写本の節はがして御用ひ」

【本文一】
初段　ころハ暦応元年二月げじゆん。せうぐん足利尊氏公。新田よし貞をうちほろぼし。かまくらつるが岡八まんぐうをぞうゑいありて。おんおとうとたゞよしこう弟直義公を。だいさんとして八まんにまふでしむ。在かまくらの執事高師直。じやちねいかんのわがまゝもの。御ちそうやくにハ。桃井若狭之助やすちか。伯州のぜうしゆ塩冶判官高貞なり。たゞよしおほせ出さるゝハ。兄尊氏にほろぼされし。につた義貞。後だいごの天皇より給ハつたる兜。そのまゝにもすておかれず。当社のおんくらにおさめよとて。ゑんやが妻のかほよ御前を。しんぜんにめしいださる。たゞよしふたゝびのたまふハ。いんじ元弘のみだれに。後だいご帝のめされしかぶと。義さだに給ハつ□れバ。さいごの時にきつらんこと。うたがひハなけれども。そのかぶとをたれ有て。見知人ほかになし。そのころハゑんやが妻。十二のないしのその内にて。兵庫司の女くわん也ときゝおよぶ。見しりあらんとのたまふ［に。いかにも義貞］どのはいれうにて〈。〉蘭奢待といふめい香を。そへて給ハるおとりつぎはすなハちかほ［よ。］その時のちよくたふにハ。人ハ一代名ハまつだい。すハうち死せんとき。此らんじやたいをおもふまゝ。内かぶとにたきしめなば。びんの髪に香をとめて。めいかうかほる首とりしといふものあらバ。よし貞がさいごとおぼしめされよ。とのことばにて有ければ。名香かほるかぶとこそ。

義貞の着すて也とて。五まいかぶとのたつがしらを。ゑらみいだしてさし上れバ。ゑんやもゝの井おほせをうけ。宝蔵におさむべしとひきつれ御座をたち」（一ウ）給ふ。かほよもおいとま給ハれバ。師直にゑしやくしてしづかにたゝんとする所を。もろ直はかねてより。かほよにれんぼしてゐたれバ。すりよつて袖をひかへ。哥道のしはん兼好が。とひあハせの状なりとて。かほにあハぬむすび文。たもとへいるゝをかほよハ見るより。はつと思へどはしたなう。はぢしめてもいかゞなり。とやせんかたもなげかへ［せど。］もろ直ハなをこりもせず。よい返事きくまでハ。くどいて〳〵くどきぬく。とからみついたるれんぼのきづな。おもひきるべきやうすにあらねば。かほよハなんぎの折からに。さいわひ来あハすわかさの介。れいの非道と見て［とるき］てん。なんなくかほよをはづさすれバ。邪魔のへんぼう師直ハさま〴〵のにくて口。わかさの介もせきたちて。すでにきらんとせしかども。神前也とかんにんなし。無念のむねをさすりけり。

二段目　もゝの井若狭の介が家老加古川本蔵。とのゝやかたにあいつめるに。妻のとなせとむすめの小浪。きのふ窪が岡にて。主人わかさの介どのと。高師直ことばあらそひあそバすとの噂なり。お家のはぢになる事なら。といひかくるを本蔵が。しかりつけて立ところへ。大星由良の助がせがれ力弥。主人ゑんやの使者として入来るよしつぐるにぞ。本蔵ハとなせにむかひ。御口上うけ給ハるハその方。お使者力弥ハ娘小浪といひなづけの聟。ちそう申せといひすてて。一間のうちに入にける。母ハむすめのこゝろをくみとり。粋をとをしてぢびやうのしやくに。かこつけておくへ行。小なみは日ごろ恋しい力弥に。あふ［嬉］さ」（二オ）

【挿絵一】

大序

もゝの井若狭の助／高の師直／かほよ御前

＊欄上「絵／初たん」

【挿絵二】

二段目

大星力弥／小浪

＊欄上「絵二たん」

【挿絵三】

其二

桃の井若狭の助／加古川本蔵

【本文二】

とはづかしさに。むねもどき〳〵出向へば。力弥ハ主人が口上を。行義たゞしくのべおハれバ。ひとまのうちよりわかさの介。力弥へへんたふ有ければ。いとま申てたち帰る［。小なみハほいなく見おくるうち。おくより出］る父本蔵を。わかさの介ハよびちかづけ。小なみを奥へとほざけて。此たび直よし公をごちそう役ハゑんやとそれがし。しかるに尊氏公の仰にて。かうの師直をおんそへ人。万事かれがげぢをうけよとの御意にしたがひ。かつにのつて日頃のわがまゝ十ばいまし。それがしにざうごんくわごん。聞すてがたきをいくたびかかんにんせしが。あすハもはやりやうけんならず。討てすてるにとむるな。と思ひこんだる主人のがんしよく。とめてもとまるまじきをさとり。本蔵ハよこ手をう□。こゝろよく聞うくるを。わかさハおのれをさみすると。いかるを本蔵おんことば。さみいたさぬ心底を。ごらんに入んとおんそばの。小刀をぬくよりはやく。ゑんさきの松の片枝。すつぱと切てまつ此とほりに。さつぱりと遊バせ。といふにわかさもこゝろよく。主従わかれのいとまごひして。ひとまのうちに入給ふ。おんうし□かげ見おくる本蔵。かつ手

ぐちへはしりいで。家来ども馬ひけ。ともだちしやんとりゝしげに。ゑんよりひらりとうち乗て。師直のやかたまで。家来つゞけとのりいだすを。やうすをきいたる戸なせと小なみ。くつわにすがりとゞむれバ。主人のお命□家のため。おもふゆゑに此のしぎぞ。この事とのへさたいたすな。おみゝへ入たら娘ハかんどう。とな□ハ夫婦のゑんをきる。道にて諸事をいひつけん。家来つゞけとかけりゆく。」（五ウ）

三段目　けふ御馳走□おん能とて。びれいをかざる諸大名。そでをつらぬるやかたのびゞしさ。なかに師直いと高き。はないろもやうのだいもんに。むねにが□んの立烏帽子。けらい鷺坂伴内ハ。かたひぢいからしつきそふたり。かゝるところへ□蔵ハ。もろ直さまにおん目みへ。といはさ「せてたち」いづるに。もろ直ハわかさの介が。おとつひのいしゆばらし。□蔵めにいひつけて。いくわうの鼻をひしがんため。ばん内ぬかるなしまふてくれん。とめくハせしたるにあんのほか。種々の進物めどをりに。ならべたてたるあまたのわう金。本蔵ハ若狭の助が。師直のさしづによつて。おん役しゆびよくあいつとむる。よろこびをのべ進物を。じゆのふあらバありがたし。といはれて主従手のうらを。かへす□いさつ本蔵ハ。してやつたりとこゝろによろこび。早おいとまとたつをひきとめ。けふのお座敷のやうすを見せん。とあるに本蔵またものハ。御前の恐れとひげするを。此もろ直がどうだうするに。誰がぐつといふものない。とつれて御殿に入にけり。ほどもあらさず入来るハ。ゑんやはんぐわん高定。早の勘平ともにつれ。時刻おくれしざんねん。とごぜんへこそハいそぎ行。おくのごてんハごちそうの。謡のこゑも高砂や。けだかききりやうの十八九。ゑんやがこしもとおかるとて。気もかるげなる奴を供。おくがたかほよのおつかひを。だしにつかふて勘平に。逢てかほみるうれしさハ。ともをかへして［只ひとり。あたり見まハ］《す折からに。》あハよく出くる早野かん平。たがゐによろこびやうすをかたり。おく様からの此文箱。はんぐわんさまのお手からすぐに。師直様へおわたし」（六オ）

【挿絵四】

三段目

さぎ坂ばん内／かこ川ほん蔵／かうのもろ直

其二

高師直／塩冶判官

＊欄上「絵同／三たん」

【挿絵五】

其三

おかる／鷺坂伴内／早野勘平

＊欄上「絵三たん」

【本文三】

あるよう。そんなら直に上てこう。と行勘平〈を〉※に※やりすごし。入かハるさぎ坂ばん内。こゝろをかけたるおかるをとらへ。みだらをはたらくその所を。師直さまのきう御用。とよびたてれてとつぱかハ。つらふくらして行あとへ。また入かハる勘平を。おかるがむりに手をとりて。あのこしかけでとつれて行。こゝに又わかさの介ハ。おのれもろ直まふたつ。とまつともしらぬ師直しゆうじう。とを目に見つけていとうへいしん。もろ直ハ両こしを。ぐハらりと投出いつぞやの。過言をわびる主従が。手をあハしたるついしやうけいはく。金のきゝめと夢にもしらぬ。わかさの介はひやうしぬけ。ねたばあハせし刀のてまへ。さしうつむきししあんがほ。ものかげにハ本蔵が。またゝきもせずまもりゐるわかさの介ハぜひなくも。その□にして主従に。一間のうちへともなハ

る。あ〈あ〉※い※もうらくじやと本蔵ハ。天地を拝してひかへゐる。程もあらせずゑんや判官。ごぜんへとをるながらうか。師直よびかけおそし〳〵。今日ハ正七ツ時と。せんこくから申わたしたでないか。成ほどおそなハりしハぶてうほふ。去ながら御前へいづるハまだ間もあらん。とたもとより文箱とりいだ□。おくかほよかたよりまへりしと。わたせバうけ取成ほど〳〵。其もとのごないしつハ。扨々心がけがござるハ。てまへが和哥のみち□こゝろをよするを聞。てんさくをたのむと有。さだめてその事ならんとおしひらき。さなきだにおもきが上のさよ衣。わがつまならぬつまなかさねそ。□てこれは新古今のうた。このこかにてんさくとハ。ムゝ〳〵。としあんのうちわが恋のかなハぬしるし。□ハおつとにうちあ□し。と思ふいかりをさあらぬかほ。はんぐわんどの此哥ごらうじたでござら」（八ウ）うの。いやたゞ今見ました。□まへがよむのを。あ□□でんのおくがたハきつい貞女。つまならぬつまなかさねそ。あゝ貞女〳〵。そのもとハあや□りもの。とせうもおそなハるはづの〔こ〕と。内にばかりへばりついてござるによつて。ごぜんのことハおかまひないじやと。あてこする雑□過言。むつとせしがおししづめ。こ〔れ〕ハ〳〵師直殿にハごしゆきげん。いつもらしやつた。御酒下されてものまいでもつとめる□□きつとつとめる。貴公ハなぜおそかつた。内にばかりへばりついてござつたか。おくがたハてい女といひ。ごき《り》やうと申。ごじまんなされうそハないハさ。そうたい貴様のやうな内にばかりゐるものを。井戸の鮒じやといふたとへが有。かのふなめがわづか三尺か四尺の井のうちを。天にも地にもないやうに思ふて。ふだんそとを見る事がない。所よりの井戸がへに。つるべにつひて上ります。それを川へはなし□ると。よろこんでどをうしなひ。はしぐひではなをうつて。ぴり〳〵〳〵と死ます。きさまもふなとおなしこと。ハゝゝゝゝと出ほうだい。はんぐわんはらにすへかね。こりやこなた狂気めさつたか。シャこいつ武士をとらへて気ちがひとハ。ムゝすりや今の悪言ハほんせうよな。くどい〳〵又ほんせうならどうする。おゝかうするとぬきうちにまつかうへきりつくる。又きりかゝるをぬけつくゞりつにげまハる。おつぎにひかへし本蔵ハ。はしり出ておし《とゞ》むる。そのまに［師直］にげて行。にはかに人々さハきだし。うゑをしたへのやかたのうち。てうちんひらめく〈。〉大そうどう。勘平ハきもをけし。なむ三ぼう御主人が。一生けんめいのばにも有あハさず。色にふけりし身のあやまりと。死んとするをおかるがとゞめ。わが親里へおち行とちう。さぎ坂ばん内けらいに下知し。ひつくゝらんとひしめくを［ふたりハおふておちゆき］けり」（九オ）

【挿絵六】

四段目

薬師寺次郎左ヱ門／石堂右馬の丞／ゑんや判官／大星由良の助／大ぼし力弥

＊欄上「絵同／四たん」

【挿絵七】

其二

大ぼし由良の助／大ぼし力弥／千崎弥五郎／矢間十太郎／原郷右衛門

＊欄上「絵／同」

【本文四】

四段目　かくて塩冶はんぐわんハ。わたくしのしゆくいをもつて。しつじ高の師直を。にんじやうにおよびつゝ。やかたをさハがせしとがによつて。あふぎが谷のかみやしきに。閉居あるこそぜひもなき。おく方かほよハはんぐわんの。おん気うつをなぐさめん。とかまくら山のやゑ

こゝのゑ。いろ〳〵のさくら花。力弥におほせ付られて。花かごにさし給ふ。かゝる所へ原郷右衛門。斧九太夫しゆしなし。［ふとした］言葉あらそひを。しだすをかほよになだめられ。両方くちをとぢたるおりから。かねてさたある上使のお入。はやおんいりとつうずるに。有あふ三人ンでむかふうち。上使にハ石堂右馬之丞。もろ直がぢつきん薬師寺次郎左ヱ門。もふけのせきにつく所に。二間のうちよりゑんやはん□わん。たちいでてあいさつおハれバ。右馬のじやうハくわいちうより。御書とりいだしおしひらけば。判官も□きをあらためうけ給ハるその文言。此度ゑんやはんぐわん高定。わたくしのしゆくいをもつて。しつじかうの師直を刃傷におよび。やかたをさハがせしとがによつて。国郡をもつしゆし。せつぷく申つくるもの也。とあ□に高さだおどろかず。いさいしやうち仕る。とおんうけなして。今日上使と聞よりも。かくあらんとごしたるゆへ。と［羽］織うは着をぬぎすつれ□。下にハよういの白小そで。無紋の上下しにせうぞく。みな〳〵これハとおどろくなかに。むねわるのやくしじも。お□ひのほかのていを見て。言句もなくて口をとづ。はんぐわんといきつく〳〵と。たゞう□むらくハや□□にて。かこ川本□にだきとめられ。もろ直をうちもらし。むねんこつずいにとをつて」（十一ウ）わすれがたし。みなと川にて楠正成。さい□のいちねんによつて。生をひきしといひしごとく。いきかハりしにかハり。うつぷんをは□さんと。かた衣はねのけ座を□つろげ。三方ひきよせ九寸五分。おしいたゞき。力弥〳〵。由良の助ハ。といふに□弥ハ手をつかへ。いまださんじやう仕りませぬ。ゑゝぞんじやうにたいめんせで。残りおほやな。是非におよバぬこ□まで。と刀さかてにとりなをし。ゆんでにつきたてひきまハす。おりからふすまふみ開きかけこむ大ぼしゆらの助。や［れ］ゆらの助かまちかねた。さだめてしさいは聞たであろ。むねんくちおしいハやい。と聞て大ぼしはつとひれふし。ごぞ□じやうのごそんがんをはいし。身にとつて何程か。このごにおよび申上ることばもなし。只ございごのじんじやうを。ね□ハしうぞんじまする。おゝいふにやおよぶともろ手をかけ。ぐつ〳〵と引まハし。くるしきいきをほつとつき。此九寸五分ハなんぢへかたみ。わがうつぷんをはらさせよと。きつさきにてふゑはね切。血刀なげだしいきたゆれバ。ゆらの助にじりより。かたなとり上ちにそまる。きつさきをうちまもり〳〵。むねんのなみだはら〳〵〳〵。判官のまつごのいつく。五ぞう六ふにしみわたり。扨こそまつせに大ぼしが。忠臣義心の名をあげしねざしハかくとしられける。かくてはんぐわんのなきがらを。家中のしよぶしハなみだとともに。ぼだい所光明寺にそう〳〵し。すみなれたるやしきをバ。あけわたして立出るに。ゆらの介ハ九寸五分。取出して〈。〉諸士にむかひ。此刀にてもろ直が。首かき切てほんいをとげん。げにもつともと忠ふかき。ものハ其義に勇けり」（十二オ）

【挿絵八】

五段目

千崎弥五郎／早野勘平

＊欄上「ゑ」

【挿絵九】

其二

百姓与市兵衛／斧定九郎

＊欄上「ゑ」

【本文五】

五段目　こゝに早の勘平ハ。女ぼうおかるがおやざとなる。山崎のほとりちかき。百せう与市兵衛がかたにわびずまゐして。らう〳〵の身のた

つきなく。かりうどゝなり猪さるを。うつてあきなふよわたりや。よやまにいでしがゆふたちに。あひてはれ間を松のかげ。しばしやすらふむかふより。小でうちんにてくる旅人。かん平ハたちよりて。きへたる火なわのひをからん。とたがひにかほを見あはせバ。たびうとハこほうばいの。せんざき弥五郎なりけれバ。たがひに身の上かたりあい。かん平ハとのはんぐわんの。御大事のばに有合せ〈ぬ〉※ず※。先非をくやみ身をうらみ。ひそかにきけバゆらの介。故殿のうつぷんさんぜんため。おもひたちあるとのうわさ。そのくハだてのれんばんに。くハゝりたき身のねがひ□。弥五郎にいひなげゝバ。弥五郎大事ハしりながら。よういにハあかされず。とせん〈く〉んのおんせひき。こんり□あれば御用金〈。〉あつむるなり。もしせんくんの。ごおんを思ハゞ。な。がてんか〳〵。とせきひになぞらへ大ぼ□のたくらみをよそにしらすれバ。かん平もかたじけなく。なるほどせきひといひたて。御用金のこし□□あ□□ときゝおよびぬ。それがしも何とぞして。用金をとゝのへ。それを手がゝりにわびことして。れんばんにく□□らん。といふにしからバ郷右衛門□で。右のしさいをものがたり。ゆらの介へねがふて見ん。めう〳〵にちハかな□ずきつと。そのへんじ〈。〉あるべし。とやくそくかため弥五郎ハ。郷右衛門のりよしゆくをつぐ〈るに〉※れば※かん平もわ□すまゐ□あかし。めう〳〵にちのさいくわいを。やくしてたがひにわかれけり。又もふりくる雨の」（十四ウ）あし。老のあ□もととぼ〳〵と。かん平がし□と与市兵衛。すぐ成こゝろかたおやぢ。ひとすぢ道のうしろから。おゝい〳〵おや□どの。よい道づれと呼ハつて。斧九太夫がせがれ定九郎。らうにんのゝちろとうにさまよひ。此かいだうのよ□たらき。与市兵衛がふとこ□に。金なら四五十両のたか。と見れバむたいにむしんをいひかけ。ふところへ手を□し〔入〕。〔引〕ずりいだすしまのさいふ。与市兵衛ハいろ〳〵に。なだめつわびつするをもきかず。定九郎ハひとうちと。二尺□寸おがみうち。その手にすがり与一兵衛。もとこの金ハひとりの娘が。大事の男のためにとて。血のなみだでで□□たかね。この金がないときハ。むすめもむこも人さまに。かほのだされぬわけのあること。金をむこにわたしてか□。ころされませうといふをもきかず。むざんの悪者なりけれバ。ぐつとついたる手足のもがき。のたくりまハるをすねにてけかへし。金がありやこそころしもすれ。金が敵じやなむあみだ。あへなくいきハたへたるしがいを。谷そこへころバしおとし。しすましたりとくだんのさいふ。つかみよみの五十両。ひさしぶりのごたいめん。かたじけなしとくびにひつかけ。立たるうしろへておひ猪。身をよぎるまにかのしゝハ。たゞひとまくりに飛で行。見おくりたる定九郎が。あばらをぬける二ツ玉。うんともいはず死たるハ。こゝちよくこそ見へにけり。しゝうちとめしとかん平ハ。さぐる手あたりしゝにハあらず。人なりけりとだきおこす。手さきにあたる金ざいふ。つかんで見れバ四五十両。天のあたへとおしいたゞき。猪よりさきへいつさんに。とぶがごとくにいそぎける。」（十五オ）

【本文六】

六段目　山崎の与市兵衛が。はにふのすみかハかん平が。らう〳〵の身のかくれざと。女ばうおかると母おやハ。よいち兵衛のかへりをあんじ。とやかうおもふそのなかへ。駕をかゝせて入くるハ。ぎおんまちの一文字や。かねておやぢとだんかふで。おかるをかふたハ五年で百両。ゆふべおやぢに五十両。わたしてかへし残りの金ハ。ほうこうにんと引かへのやくそく。あとがねわたしてつれてゆく。と金とりいだしおかるをひつたて。かごへおしこみかきあぐる〈。〉を。もどりかゝつて見る勘平。ふしんはれねバしばしととゞめ。やうすをとへばかう〳〵。と亭主のは

なし母おかるが。ものがたりさへきゝおハるに。ゆふべしうとがくびにかけ。もどりし縞の金ざいふハ。くつわのていしゆがきたしまの。ひとへのきれときくよりも。きもさきにひしとこたへ。そばあたり□目をくばり。たもとのさいふ見あハせバ。すんぶんちがハ［ず］なむさんぼう。さてハゆふべてつぽうで。うちころしたハ□□とであつたか。はつとわがむないたを。二ツ玉でうちぬかるゝより。せつなき思ひとハしらず。女ばうおかるハとに□□に。父のかへりをまちわびれバ。しうとにハけさあひし［が。かへりハしれぬとかん平］が。いふにおかるハせんか□なく。□とまごひさへなみだにて。ともなハれてぞゆきにける。母ハ見おくりたちかへり。かん平にうちむかひ。おやち□□にあハしやつて。どこへわかれてゆかしやつた。ととハれてかん平。されバわかれた其所ハ。鳥羽か。伏見か。淀〔竹〕田。と口からでしだいこたふるうち。所のかりうど三人ゝづれ。おやぢのしがいにみのうちきせ。戸いたにのせ〔て〕うちにい□。夜山しまふて〈もどり〉がけ。おやぢがころされてゐられたを。つれてきたとぞいひにける。」（十五ウ）

＊十五ウに貼紙を貼付、朱筆（二行割書）書入れあり。「爰ハ十五丁ニて相成レバ□…□〔而〕切目／とぢ分被成□□□…□はよろし」〔神林注・□…□は欠損字数不明。紙片の破損を継いだものと推定〕

＊十五ウ最終行の行末に朱字書入れ「爰にて書切候やう」。

聞よりはつ□とおどろく□□なくよりほかの□□ぞなき。かりうどどもハかへりしのち。母かん平のそばにより。ふしんのさま〳〵いひ□らべ。ふところより引いだすハ。ちらりと見つけた此さいふ。血のつひてあるからハ。こなたがおやぢをころしたの。と□らみつくどきつせめさいなむ。身のあやまりにかん平ハ。ごんくもなくてゐるおりから。原郷右衛門せんざき弥五□□□来□かん平が。弥五郎にわたせし金を。封のまゝさしもどし。せきひをいとなむハ亡君のごぼだい。不忠不義せしそのほうの。金子を用いられん〈ハ〉はゞかり。それゆゑにこそさしもどす。と聞て母おやかん平が。身のあ□□んをものがたるに。両人ゝほとんどあきれはて。事をときりをせむれバ。かん平今ハたまりかね。刀をはらに□［き］たてて。ゆふべのあらましつぶさにかたり。ぶうんにつきたる身のなりゆきを。くやみなげきしむねんのなみだ。弥五郎ハずんど立。しうとがしがいのきづぐちあらため。てつぽうきづにハあらずといふに。郷右衛門もこゝろづき。来たる道にて定九郎が。しがいを見たるものがたりより。与一兵衛をころしたるハ。さだ九郎にてありけること。めいはくにしれかん平ハ。おやのかたきをそくざにむくひ。思ハず功をたてたるゆゑ。ひそかに見するもの有とて。郷右衛門ハくわい中より。一巻をとり出し。此度亡君のかたき。高の師直をうちとらん。と神文を取かハし。一味とゝうの連判なりとて。かん平を《も》れつにくハへけれバ。手負もうれしくわうじやうけれバ。原千崎ハいとまをつげ。やがて此家をいてさりけり。」（十六オ）

【挿絵十】

六段目

一文字屋才兵衛／おかる／早野勘平

＊欄上「ゑ」

【挿絵十一】

其二

原郷右衛門／かん平／母／千崎弥五郎

＊欄上「ゑ」

【挿絵十二】

七段目

寺岡平右衛門／大星由良之助

＊欄上「ゑ」

【本文七】

七段目　大星由良の介ハぎおん町のあけやにて。ゐつゞけざけの大めれん。こほうばいの斧九太夫は。師直がたへこゝろをよせ。さぎ坂ばん内どうだうにて。あげやへ来り大ぼしが。虚実をひそかにさぐるこそ。いとにくむべきわざなりけり。矢間せんざき竹もりの。三人ゝもまた大ぼしが。性根をバ見とゞけん。とあしがる寺をかへい右衛門を。つれておなじくあげやへ来るに。ゆらの介ハ大なまゐひ。めんないちどりのおにわたし。手のなるほうへとはやされて。いできたるを三人ゝが。にがいかほにておつとりまき。かまくらへうちたつじこうは。いつ頃なりとのとひあハせに。こたへもなくてはなうたの。よこにまろびてたあいなき。やうすに三人ゝあいそうつかし。本心ハ見へすいたり。一味の□のへの見せしめ。といちどにきらんとたちよるを。平右衛門ハしばしととゞめ。おくのざしきへ三人ゝを。やりておのれ□ゆらの介を。さま〳〵にかいほうなし。つゞいておくへ入たるあと。ちやく子力弥ハ山科より。いきせき来りてねいり□る。父がそばにて刀のつばをと。こいぐちちやんとうちならせバ。父がおきるを力弥はさしより。たゞ今みだ□かほ□さまより。きうのおひきやくみつじの御状。かたき高の師直。きこくのねがひかなひ。きん〳〵ほんごくへま□り□る。いさいの義ハお文と□ごゝうぜう。よし〳〵その方ハやどへかへり夜の内にむかひの駕。いけといはれ□たちかへる。状のふうじをきる所へ。九太夫おくよりたち出て。たがひにぶじのあいさつをはり。酒ゐんとなりた□おりをさ□わひ。ゆらの介をためさんため。九太夫ハぼうくんの。めいにちのたいやながら。蛸」（十九ウ）ざかなをはさ□□いだせバ。只ひとくちにあぢハふふぜい。邪智ふかき九太夫もあきれてことばもなかりけり。ゆらの介ハあしもと□しどろもどろでおくへ入る。しゞうを見とゞけさぎ坂ばん内。二かいよりおり来り。あのとをりのやうすもろ□へ。も□し聞せて用心の。門ひらかせんとあんどのてい。九太夫ハ大ぼしが。おきわすれたる刀をぬき。見れバさびたる□いわし。いよ〳〵ほんしん見とゞけしと。ふたりハよろこび九太夫ハ。かへるふぜいに見せかけ［て。ゐんのしたやへしのび□ハ。さい］ぜんりきやかぢさんせし。状のやうすを見とゞくる。くめんと聞てはん内ハ。ひとり先へぞかへりける。折に□かいへかん平がつまのおかるハゐひざまし。ゆらの介ハおくよりいで。あたり見まハしつりどうらうの。あかりにてらしよむ文ハ。敵のやうすこま〳〵と。みだいよりしらせの状。おかるハ二かいでのべかゞみ。いだしてうつしよみとる文章。したやよりハ九太夫が。くりおろす文すかしよみ。おかるがかんざしおつるおとに。はつとうしろへかくす文。ゆらの介ハおかるを見つけ。よびおろしてさま〳〵。とたハむれのうゐ身うけのさうだん。おかるハうれしくおもふうち。ゆらの介ハ金わたし。らちをあけんとおくへ入。折にいであふ平右衛門。妹［にあふて身］うけのはなし。聞ば大事の文見てから。身うけの事になりしといふより。平右衛門ハぬきうちに。おかるをきらんとなしけれバ。やう〳〵のがれてしさいをとへば。ゆらの介殿もそのはうを。〈うけ〉※身※だしたうへころすりやうけん。みつしよをのぞき見たるがあやまり。命をくれなバわが功に。連判のかずに入。といふにかくごのおかる〈ハ〉※か※自害。なさんとするをとゝむる大ぼし。かたな」（二十オ）

【挿絵十三】

其二

おかる／九太夫／由良の介／平右衛門

＊欄上「絵」

【挿絵十四】

八段目

戸なせ／小なみ

＊欄上「ゑ」

【挿絵十五】

九段目

となせ／小なみ／かこ川本蔵

＊欄上「ゑ」

【本文八】

とる手をもちそへて。ぐつとつきこむたゝみのすきま。下にハ九太夫かたさきぬハれ。くるしむを平右衛門。さしづをうけてひきずりいだすを。ゆらの介ハてうちやくなし。うらみをのべ悪をせめ。さいぜんわすれしさび刀で。なぶりごろしにさせたるハ。こゝちよかりし有様なり。かくれ聞たる矢間千崎。竹もりハ出きたり。うたがひはるれハ大ぼしに。あやまりをのべけれバ。ゆらの介ハ平右衛門に。くらひゑふたそのきやくに。加茂川で水ぞうすいをくらハせい。と下知をつたへて入にける。

八段目　かこ川のむすめ小浪ハ。大ぼし力弥といひなづけ。たのみもとらずそのまゝに。おとづれなきを母となせ。むすめをつれて山しなの。すみかへおしてよめ入も。わづか親子のふたりづれ。不二のけむりのそらにきへ。ゆくゑもしれぬ思ひをバ。はらす嫁入の盃すんで。ねやのむつごとさゝめごと。うれしからうと手を引あい。山しなさして上ける。

九段目　人の心のおくふか□。山科にもとめたる。ゆらの介がかくれがを。たづねてこゝにくる人ハ。かこ川ほん蔵が女ばうとなせ。のり物を□たへにまたせ。両刀こしに戸口におとなひ。あないの下女にともなハれ小浪をかごよりよびいだし。もろと□に座になをれバ。大ぼしがつまお石ハたち出。たがひにあいさつおハりてのち。となせハおしてのよめ入［の。し□□を□］なしてかの二タこしを。さしいだせバこなたのおいし。らうにんの今にてハ。おもひもよらぬおもむきを。いへば□な□もやくそくを。へんがいさせぬといひつのり。母おやどしのことばのあらそひ。はてハおいしがしうとめざり□□つた〳〵といひはなし。心へだてのからかみを。はたと引たて入にける。小なみハわつとなきいだし。」（二十三ウ）母にすがりて□□〳〵と。くどきたてたる心のみさを。貞女［のまこ］とあらハせバ。母ハたまらずじがいとかくご。むすめもころして下□りませ。さられてもとのごのうち。こゝで死れバほんもう。と母と娘ハしぬかくご。そなたをわしが手にかけて。母もお□□けあとから。とふりあぐるやいばの下。じんじやうなる小なみがかくご。折からおもてにこむそうの。尺八のねのきこ□し□御無用とこゑかけられ。あちらかこちらをさだめかね。又ふりあぐる又ふきいだす。かなたこなたの刀と尺八。また□無用。ウムまた御無用ととゞめたハ。とふしんたつれバ。イヤおかたなの手のうち御無用。せがれ力弥にしうげんさせ□。としうぎの小うたひ。白木の小じはう。たづさへてお石ハいで。世のつねならぬさかづきを。うけとるハ此三ばう。と聞て刀をさやにおさめ。引出物の御しよもうならん。とかのふたこしをさしいだせバ。御しよもう申ハ是でハない。本蔵どのゝお首也。御主人ゑんやはんぐわんさま。師直におうらみあつて。ひとかたなに切かけ給ふ。其時こなたのおつとかこ川ほん蔵。いだきとめたばつかりに。御ほんもうもとげられず。殿ハやみ〳〵御せつぷく。それゆへのぞむとあることばに。親子ハはつとさしうつむき。とはうにくれし折からに。くびを上とおもてより。こむそうでたちの本蔵が。入来ておいしにむかひ。さま〳〵あつこうざうご

んを。お石ハはらにすへかね〔＊神林注・元「お石ハはらに…」とある
を、朱筆にて前後を入換〕て。鑓おつとつてつきかくるを。手もなく本
蔵ひざにひつしく。力弥ハかけいでやりをバひろひ。本蔵がめてのあば
らゆん手へとをれとつきとを〈し〉※す※。とゞめさゝんとする所を。
まてととゞめてゆらの介。手おひにむかひ死かくごの。ほしをさし」
（二十四オ）

【挿絵十六】

其二

ゆらの介／おいし／りきや／となせ／ほん蔵／小なみ

＊欄上「ゑ」

【挿絵十七】

十段目

大鷲文吾／よし松／矢間十太郎／天河屋儀平／片山源吾／小寺千内

＊欄上「ゑ」

【本文九】

たるがんりきに。本蔵ハはんぐわんを。だきとめたるあやまりを。のべ
てしらがのわが首を。とつて力弥にむすめをば。そハせてくれとのたの
み也。ゆらの介も本心を。あけて見せたるおくにはに。雪をつがねて五
りんのかたち。ほん蔵ハくわい中より。もろ直がやしきの絵図。［だし
てわたせバ大ぼしよろこび。］てき地のあんないしれざるゆへ。ほつそ
くもゑんいんせり。此ゑづこそハわがための。りくとうさんりやくとお
しいたゞき。ひとまづさかいへ下つてのち。あれからすぐにほつそくせ
ん。力弥ハ母よめとなせどのもろともに。あとのかた付諸事万事。心の
こりのなきやうに。あすの夜ふねに下るべし。われハさいわひ本蔵ど
のゝ。しのびすがたをわがすかた。とけさてんかいをそのまゝに。いで
行あとに本蔵ハ。［終に此世を去にけり。］

十段目　和泉のさかいに天川や儀平といへるてうにんあり。ゆゑあつて
つまをさり。手代めしたきにひまをやり。ことし四ツのせがれよし松。
あほうの伊吾のみゐるばかり。おりから入来る此やのしうと。大田了竹
といふやぶいしや。むすめの去状もら〔ひ〕たし。さなくハわれも娘と
いつしよに。此家へ来りてかゝらん。といふもてまへのものだくみ。儀
平ハ義士らにたの□〔ま〕れて。あつらへの道具いちまき。舟につんでいだす
のも。せけんへかくす一大事。女ばうがもどりなバ。頼□〔れ〕た□〔人々〕へ。詞
たゝずへ。〉としあんをさだめ。工にのるとハおもへども。いとまの状
をかきしたゝめ。了竹をかへしけり。夜□〔も〕は□〔や〕てうどいのこくすぎ。と
りての人数こみいりて。とつた〳〵とおつとりまく。こハ何ゆゑといハ
せもたてず。お□〔の〕れ大ぼしゆらの介にたのまれ。ぶぐばぐを大まハしに。
鎌倉へつかハすじやう。めしとつてがうもん」（二十六ウ）する。といふ
を儀〔平〕がちんずるを。あらそハれぬせうこありとて。よひにつんだ
るござ荷のながもち。きりほどきあけんとするを。儀□〔平〕ハう〔ゑ〕にど
つかとすハり。中を見ぜし〔マヽ〕とあらそへば。とりてハよし松人じちに。白
状させんとはかれども。いつかな儀平ハ□〔ち〕つと□〔も〕どうぜず。わが子をも
ぎとりしめころさん。とするをしばしとこゑをかけ。ながもちよりゆら
の介が。たちいでて□〔ま〕ことをあかし。なじみちかづきなき人々へ。うた
がひはらさせあんどさせんためなりし。しかるをへんぜぬ義勇のほど。
あ□ぎたてかんしんなし。立出んとする所を。儀平ハ手打のそば切に
て。もてなさんとて大ぼしをおくの一ト間へともな〔ひ〕ぬ。《こゝに》
ぎへいが女ばうおそのハ。あきもあかれもせぬなかへ。さり状とつてか
なしみなげき。子にひかされてたちもどる。おつとが門をおとなへば。
儀平ハさつた女ばうゆへ。いれじといふを女ばうハ。親とひとつでない

しやうこ。うたがひはれて。となげこむさり状。儀平ハさま〳〵ことばをつくし。やうすあつてひまやるでなし。しばしのうちおやざとへ。かへつて居よといひきかせど。おそのハおやのよくしんから。かへればほかへよめらす。とあるにさとへハもどられず。おつとが家へハ入られず。わくかたもなくかなしみなき。戸口へみゝをさしよせて。もしやわが子がこゑするか。かほでも見せてくれるか。とうかゞへどおともせず。ぜひもなやこれまで。とおもひきつてかけいだす〈。〉を。しのびすがたの大男。かたなをぬいてわげぶしを。根より切とりふところまで。ひつさらへてにげて行。何ものかむごたらしうかみきつてかいたものまで。とつていんだとかなしむおその。儀平もおどろきさハぐうち。ゆらの介おくよりたちいで。しんせつ」（二十七オ）

【挿絵十八】

其二

儀平／おその

＊欄上「ゑ」

【挿絵十九】

其三

儀へい／おその／ゆらの介／ぶんご／十太郎

＊欄上「同」

【挿絵二十】

十一段目

大ぼし力弥／原郷右衛門／高の師直／大星由良之介／矢間十太郎

＊欄上「同」

【本文十】

のれいをのべ。おきみやげとてひとつゝみを。のこせバ義平ハ町人と。見あなどつてのしやもつかと。はらたちまぎれけとばすつゝみ。ほどけていづる切髪さり状。ふうふ〈ハ〉※か※あきれ《て》見へたるを。此ゆらの介が大わしを。うらよりまハらせきつた心ハ。いかな親でもあまほふしを。よめらそうともいふまいし。よぶものハ猶あるまい。髪ののびるあいだハ百日。われ〳〵がほんもうを。とぐるも百日ハすごすまじ。うちおほせたのちめでたくしうげん。ゆらの介ハめいどから。仲人なさ〈ん〉といハれてふうふハ。こゝろざしのれいをのべ。その出立を見おくれバ。きでんの家名の天河屋をすぐに夜うちの合詞。天とかけなバ河とこたへ。あまよかハよと申なら。きこうも夜討においでもどうぜん。義平の義の字ハ義臣の義の字。平ハたいらかたやすくほんもう。早おいとまとゆらの介ハ。わかれてこそハいでてゆく。

十一段目　ゑんやが家臣大ぼしゆらの介をはじめとして。いちみの勇士四十よき。く〈さ〉※す※りばかまに黒ばをり。忠義のむなあてうち□〔そ〕ろひ。とるべき首ハたゞひとつ。とゆらの介が下知にしたがひ。ひつしのほこさきするどの勇士ら。師直がやしきにこみ入。ひじゆつをつくしてたゝかひしが。師直とおぼしきもの。かげもかたちも見せざる所に。やざま十太郎もろ直をちうにひつ立。いけどりにするときゝ。あまたの義士ハはなにつゆ。いき〳〵いさんでゆらの介十太郎がてがら□〔を〕ほめ。扨礼義をあつうなし。いづれもひごろのうつぷん此とき。とゆらの介ハかたみの刀で首かきおとし。亡君の〔い〕はいにたむけ。よろこびいさんでかちどきハ。あたりにひゞく忠義の名。後の代までもつたへける。めでたし〳〵〳〵」（三十ウ）

〈付記〉本稿を成すにあたり、ご教示を賜りました佐藤至子氏・鈴木俊幸氏に深謝申し上げます。

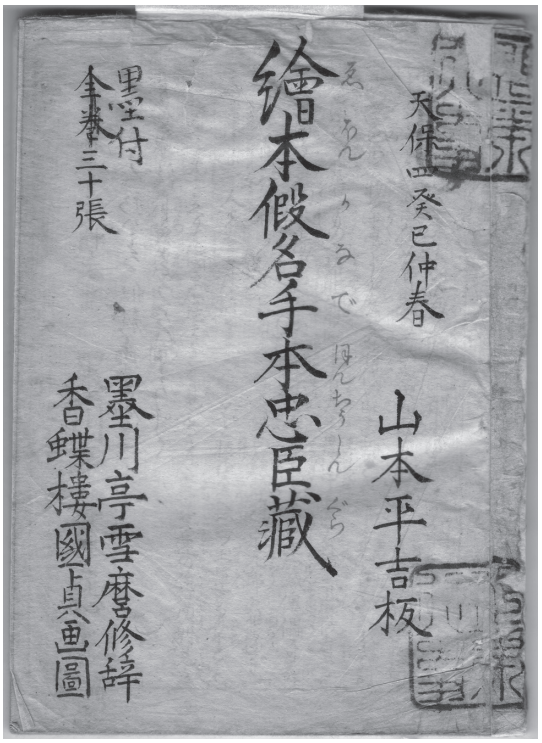
天保四癸巳仲春
山本平吉板
繪本假名手本忠臣藏
墨江付
全巻三十張
墨川亭雪麿修辞
香蝶楼國貞画圖

図1

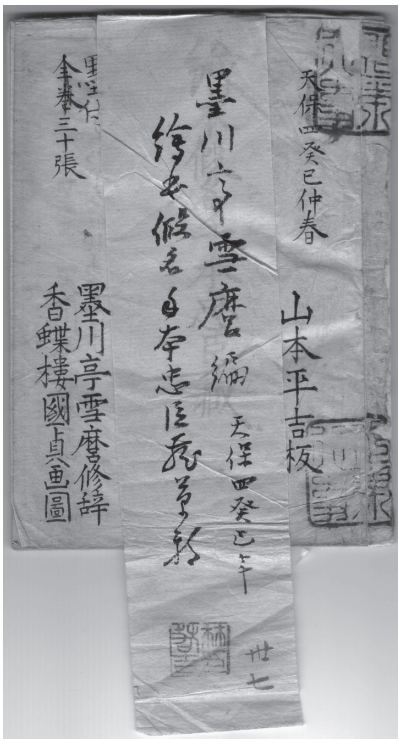
天保四癸巳仲春
山本平吉板
墨川亭雪麿編
墨江付
全巻三十張
墨川亭雪麿修辞
香蝶楼國貞画圖

図2

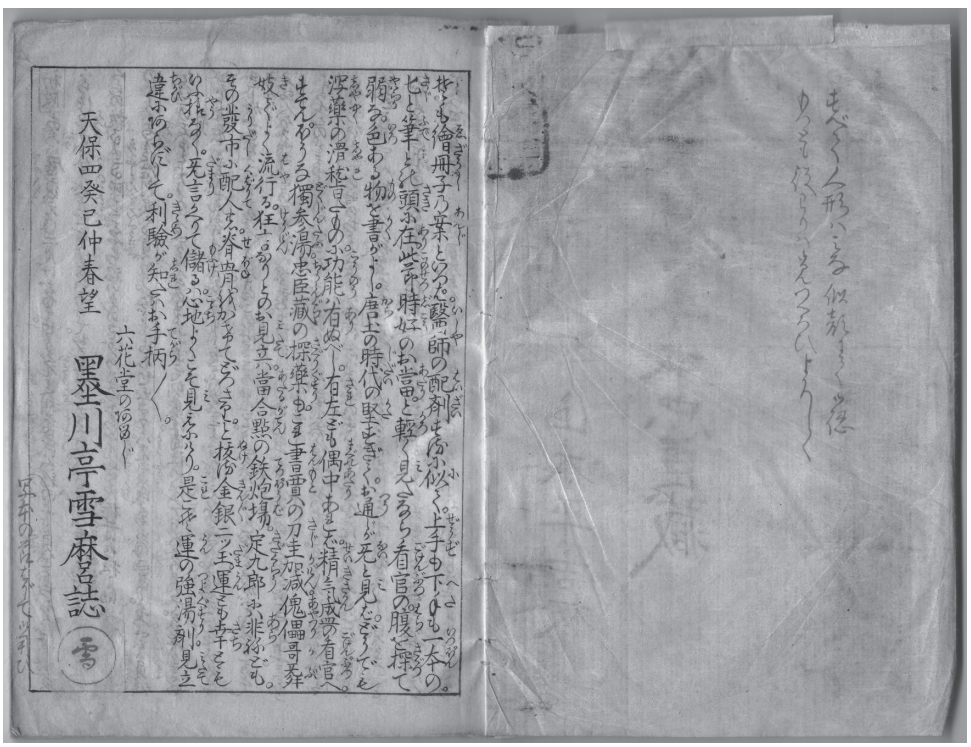
天保四癸巳仲春望
墨川亭雪麿誌

図3

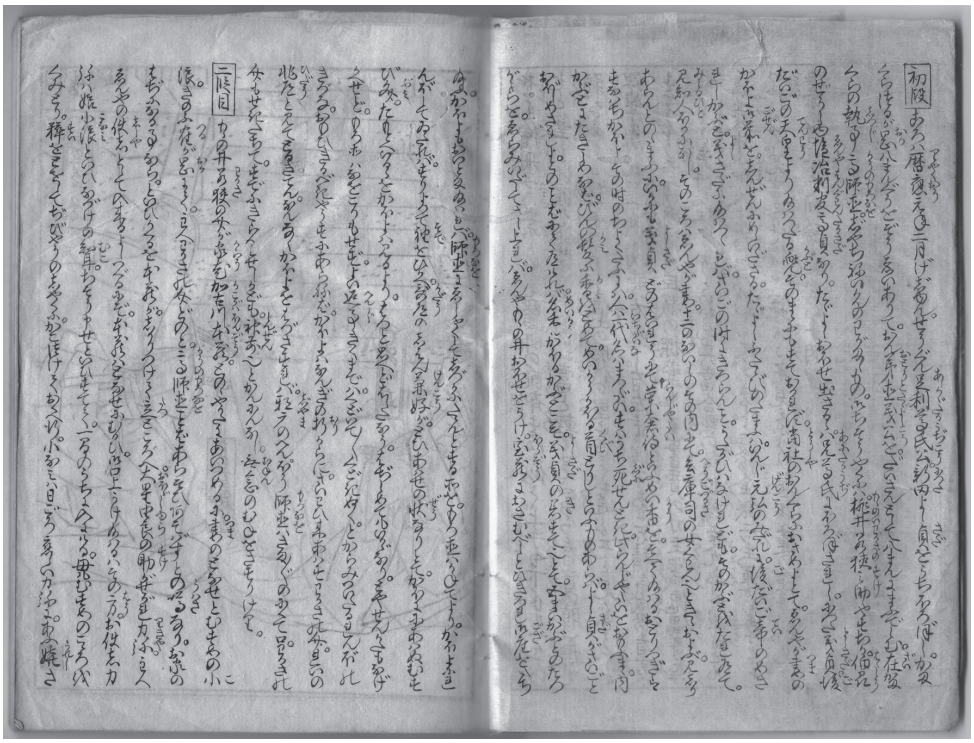

図4

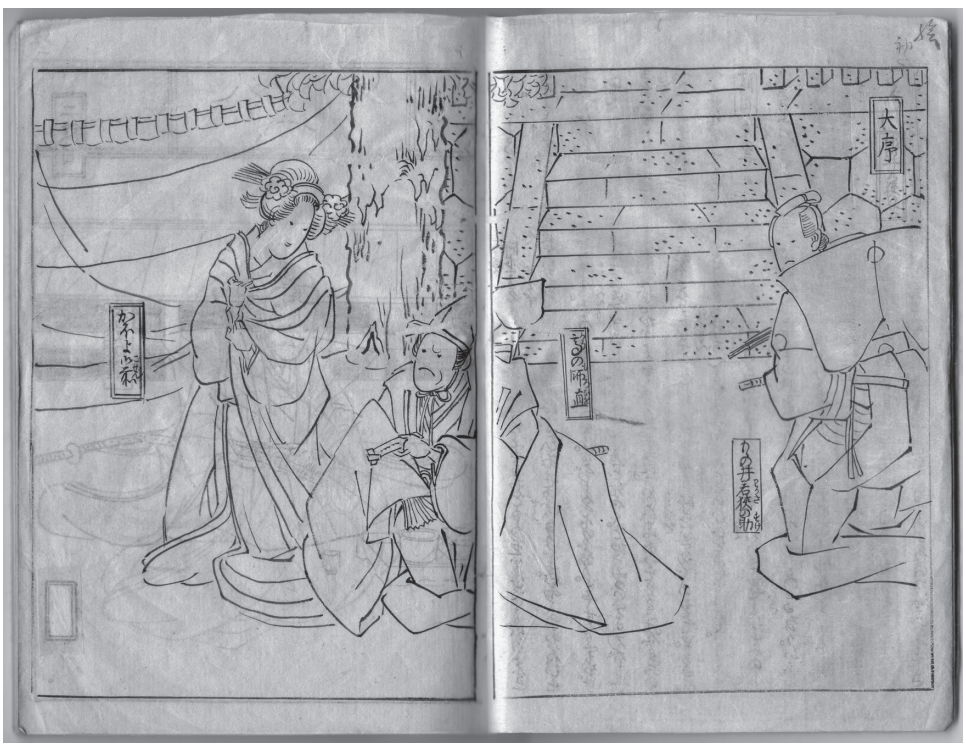

図5

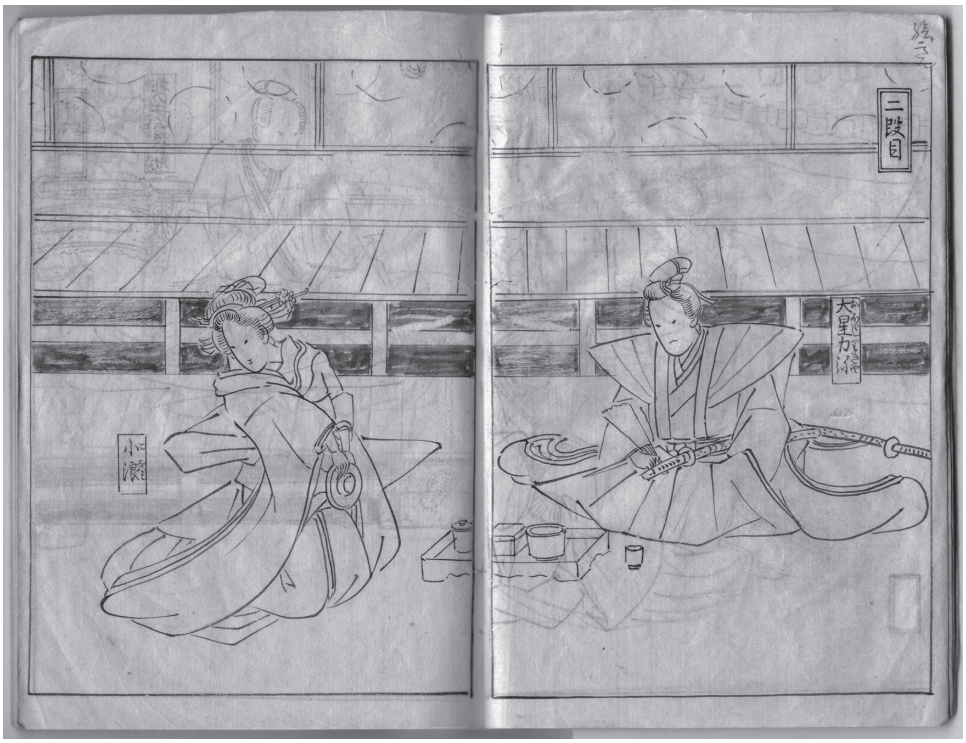

図6

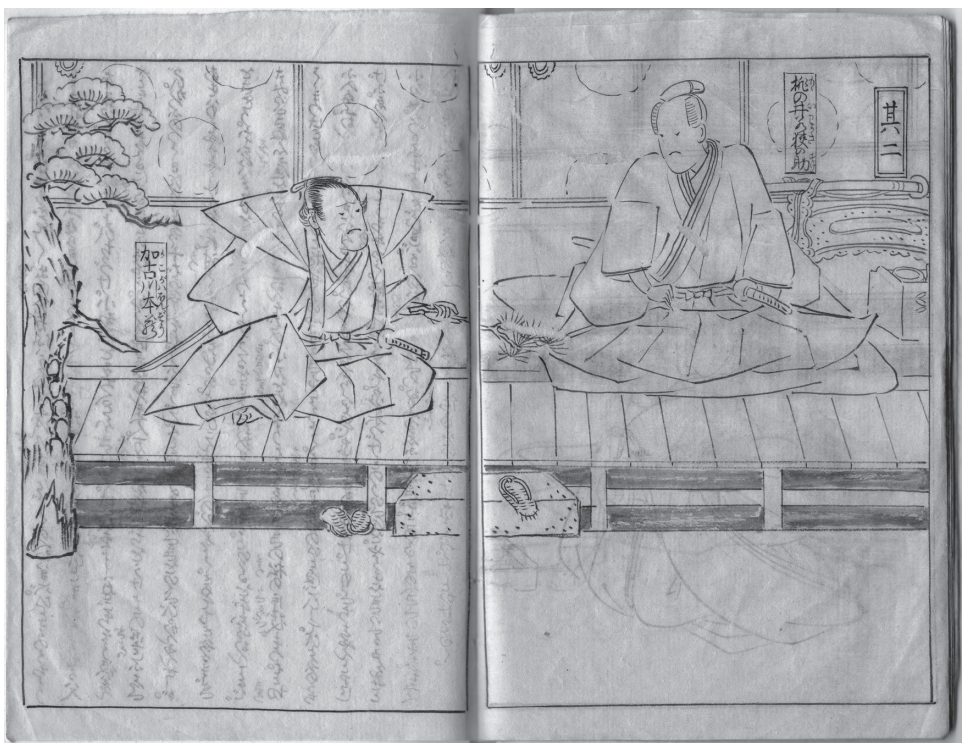

図7

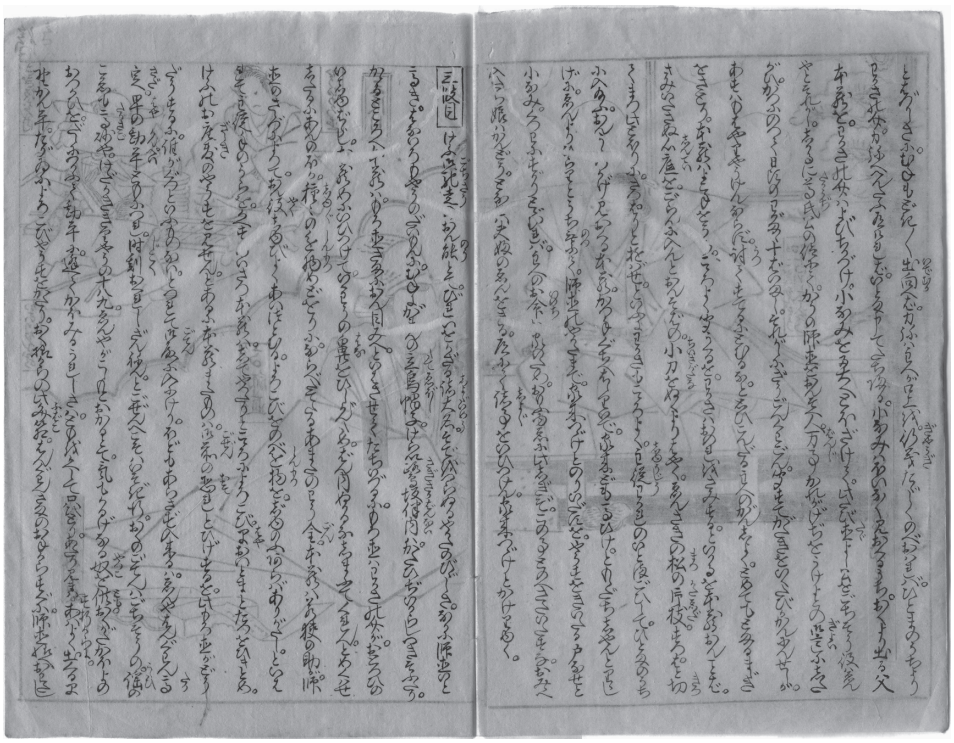

図8

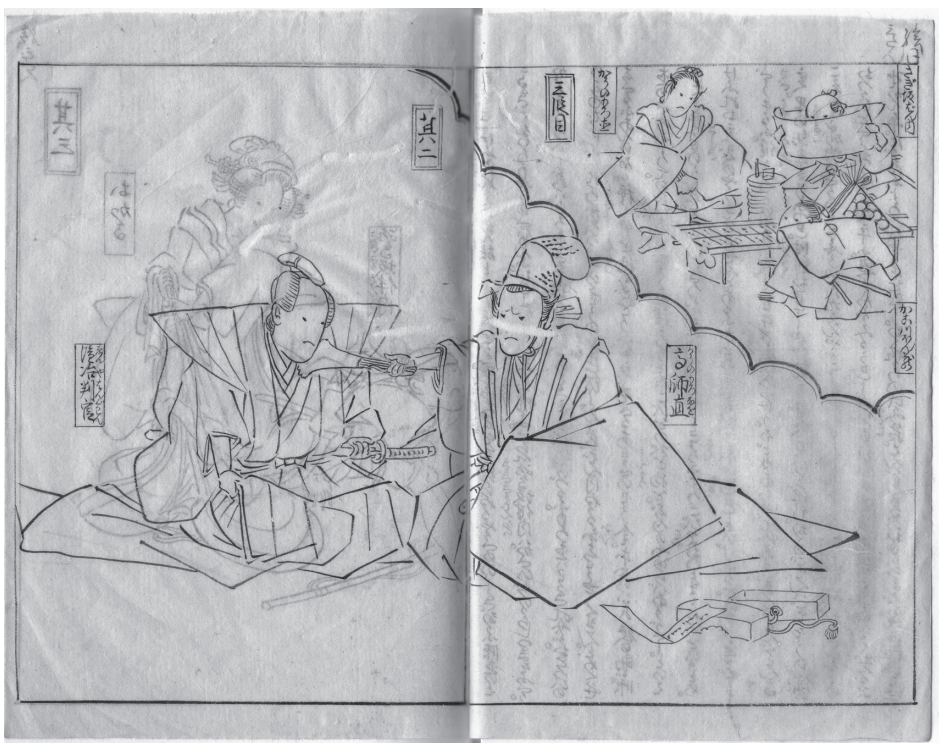

図9

図 10

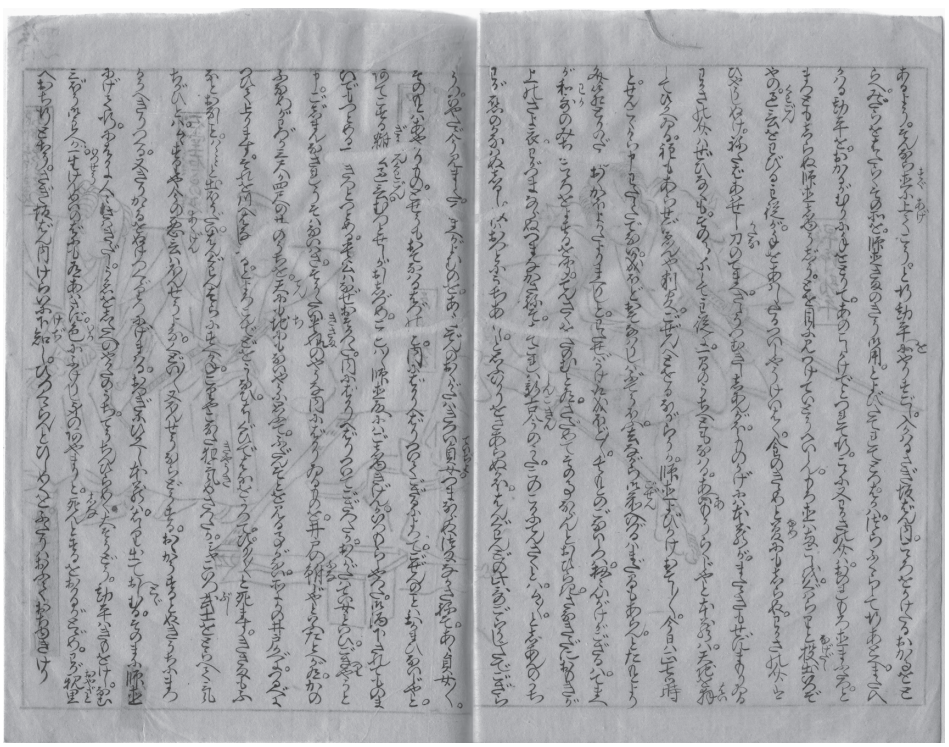

図 11

図 12

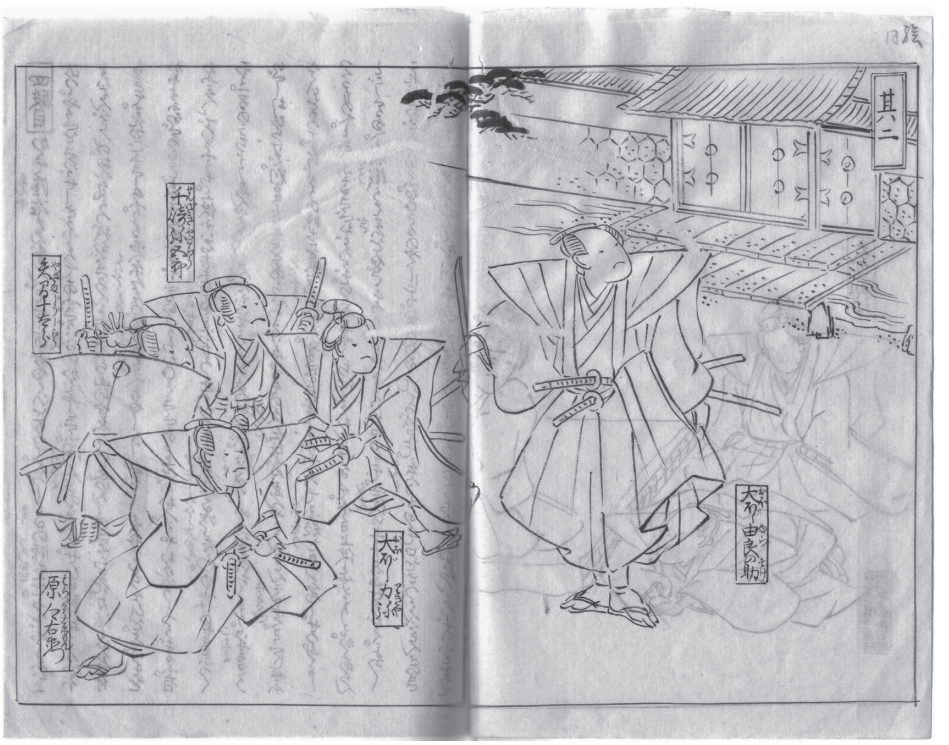

図 13

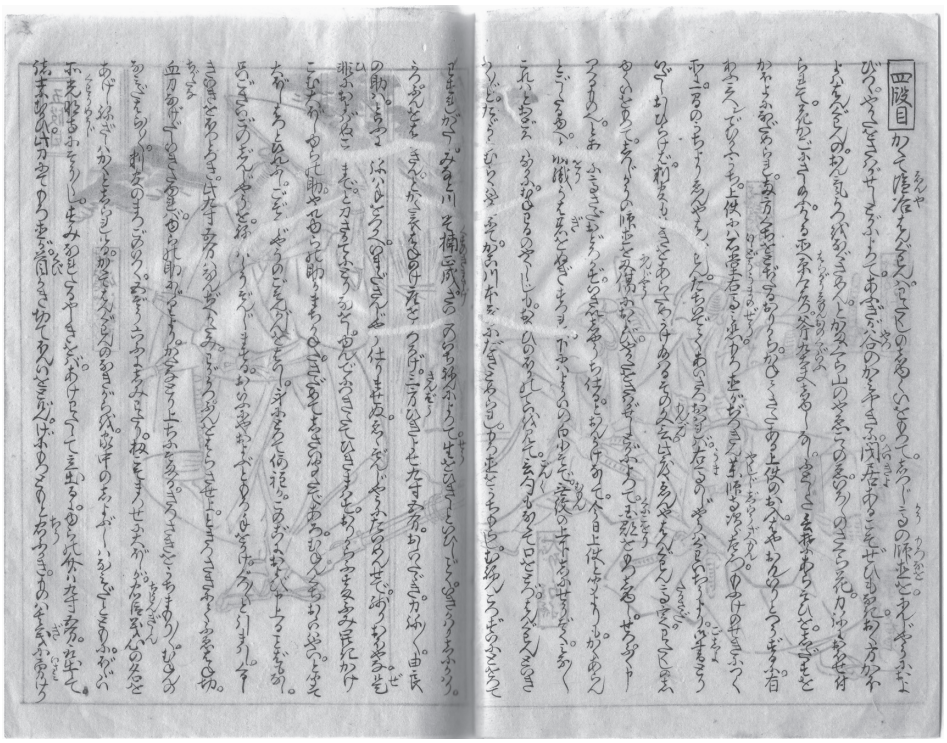

図 14

図 15

図 16

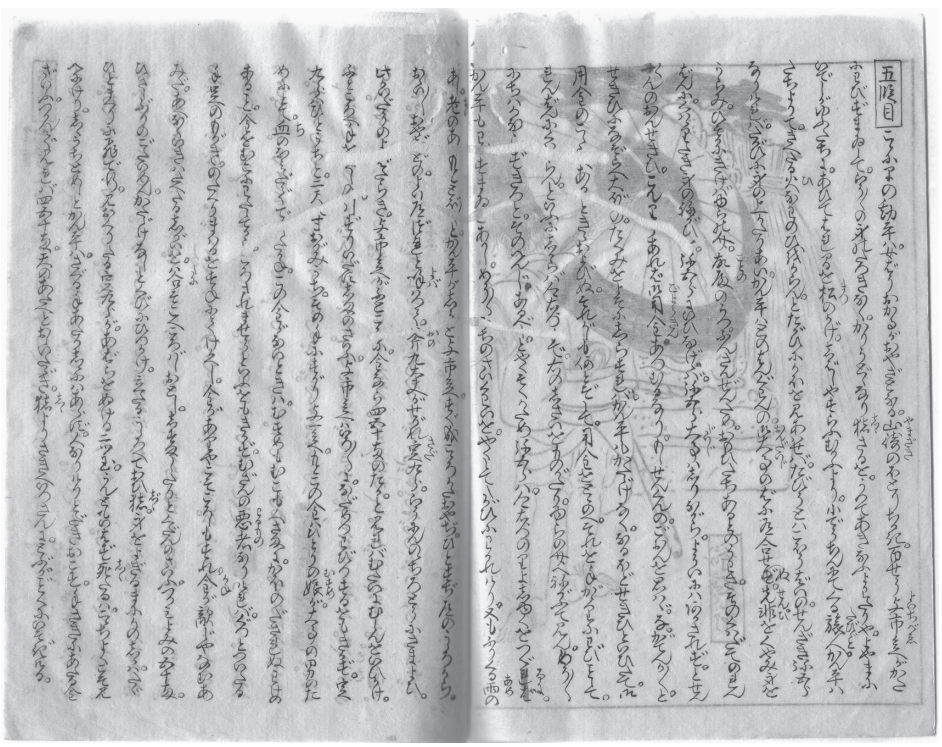

図 17

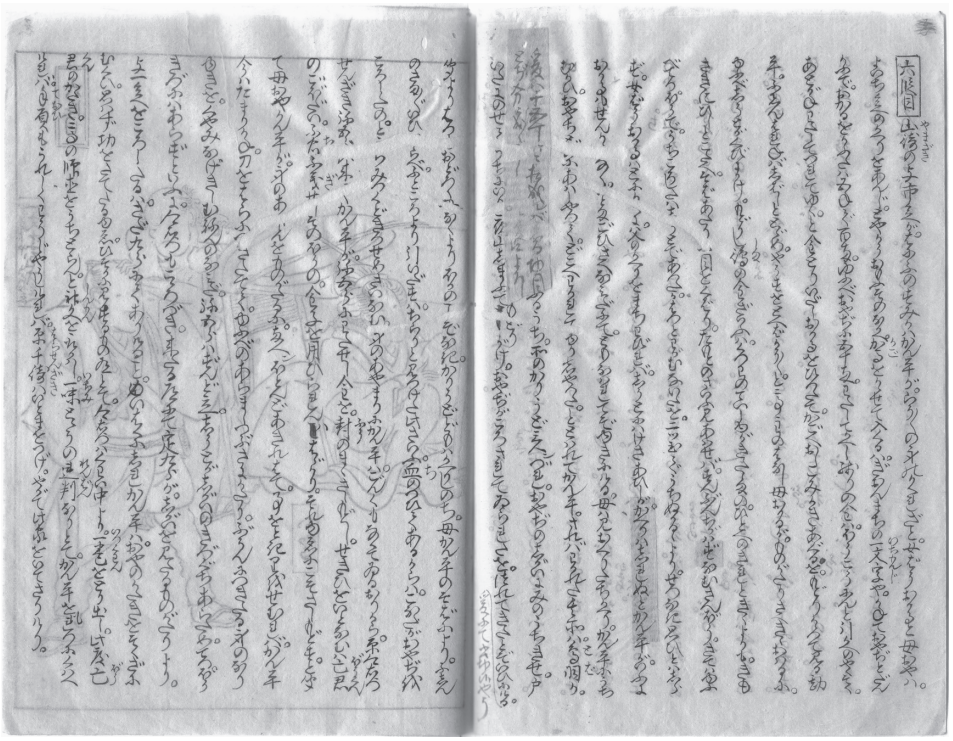

図 18

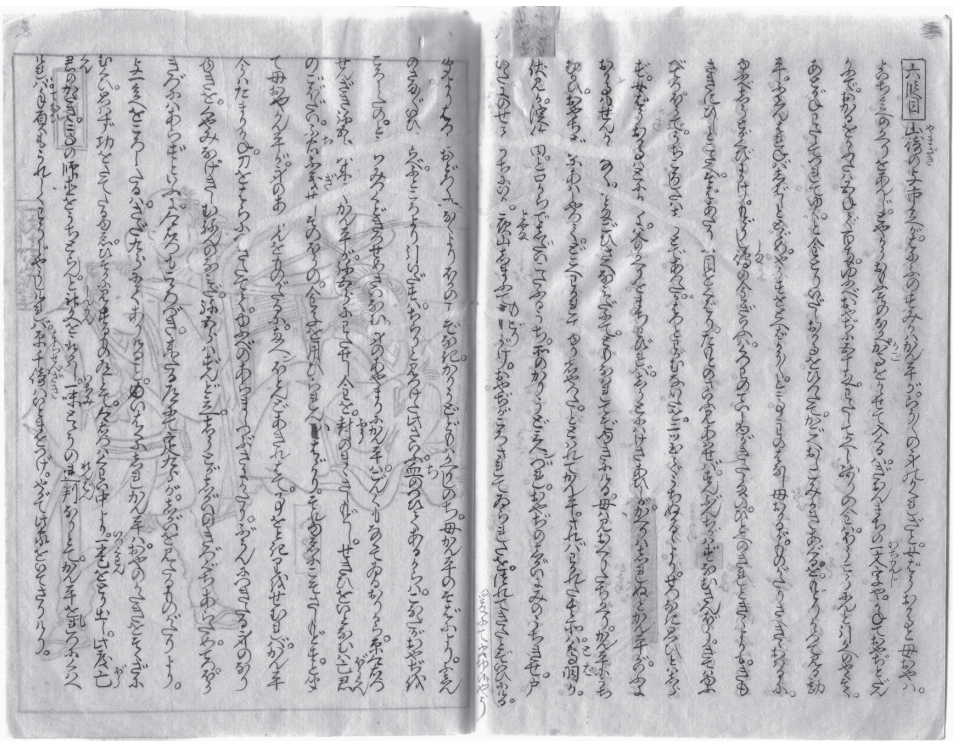

図 19

図 20

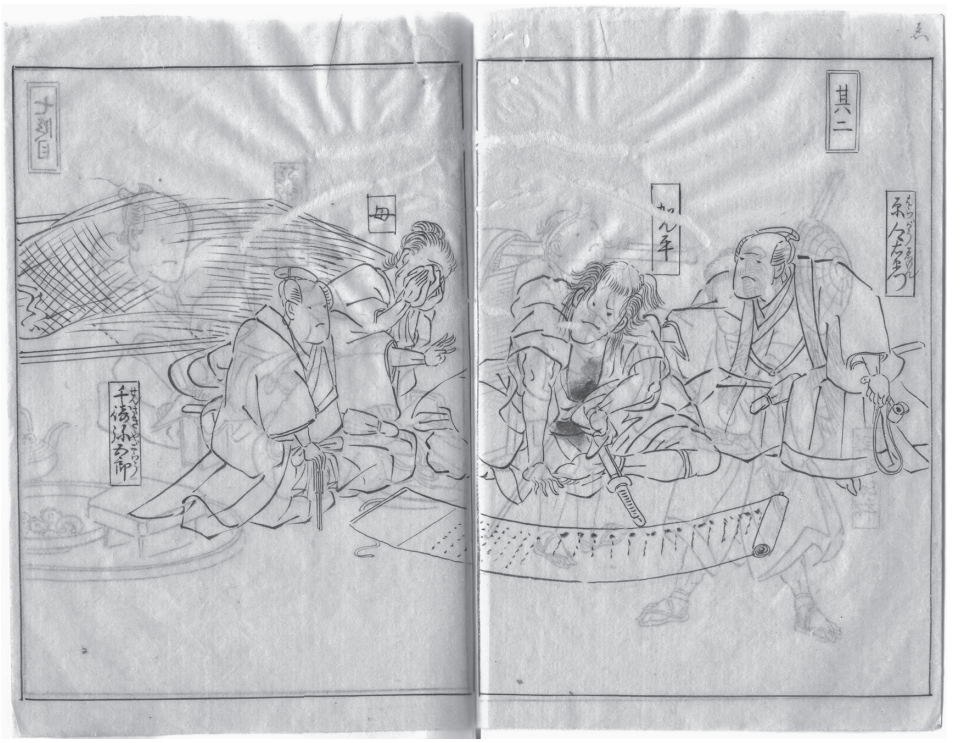

図 21

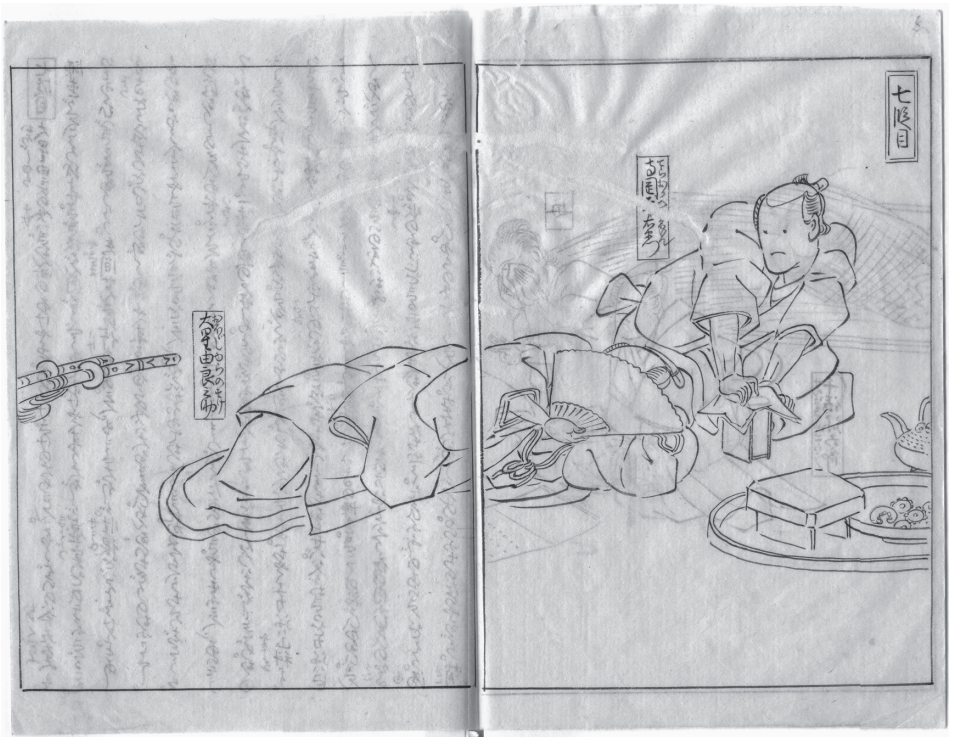

図 22

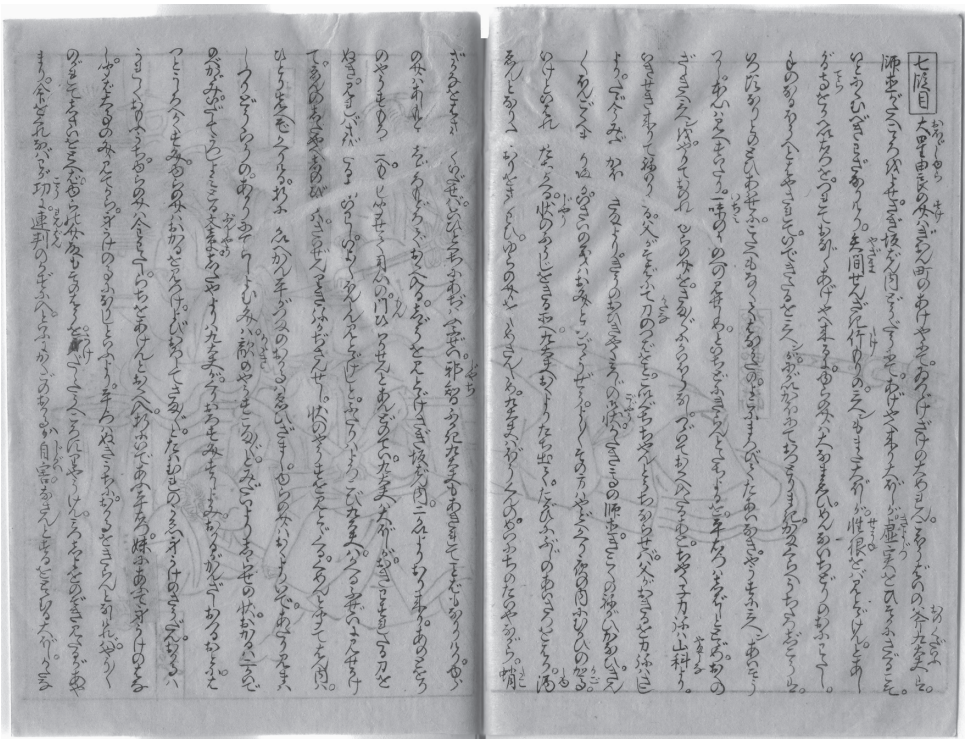

図 23

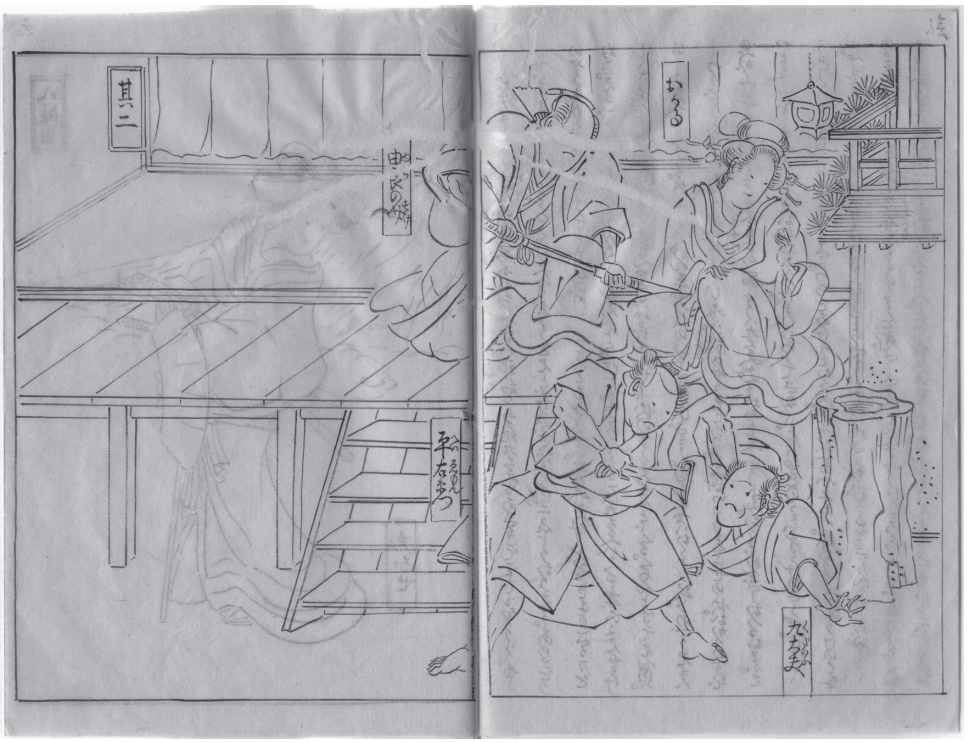

図 24

図 25

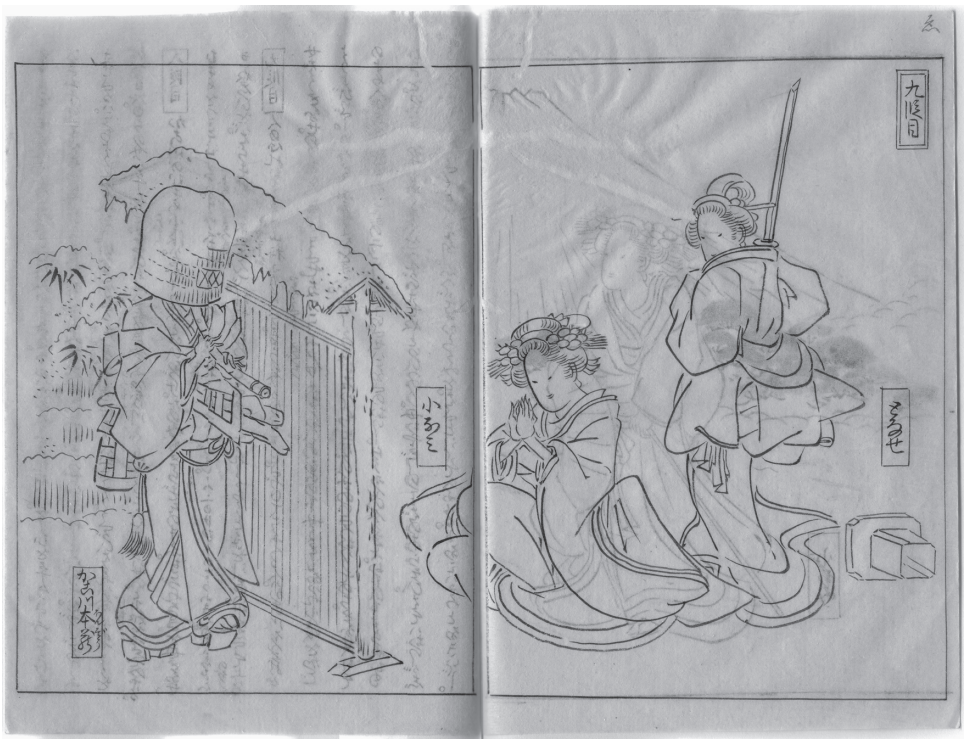

図 26

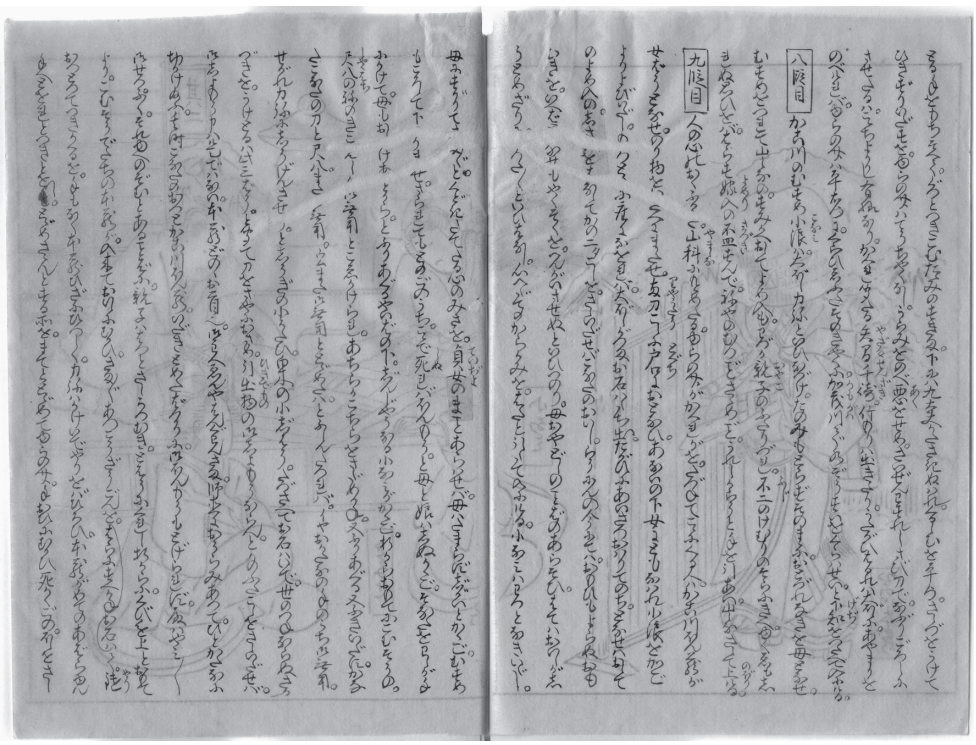

図 27

図 28

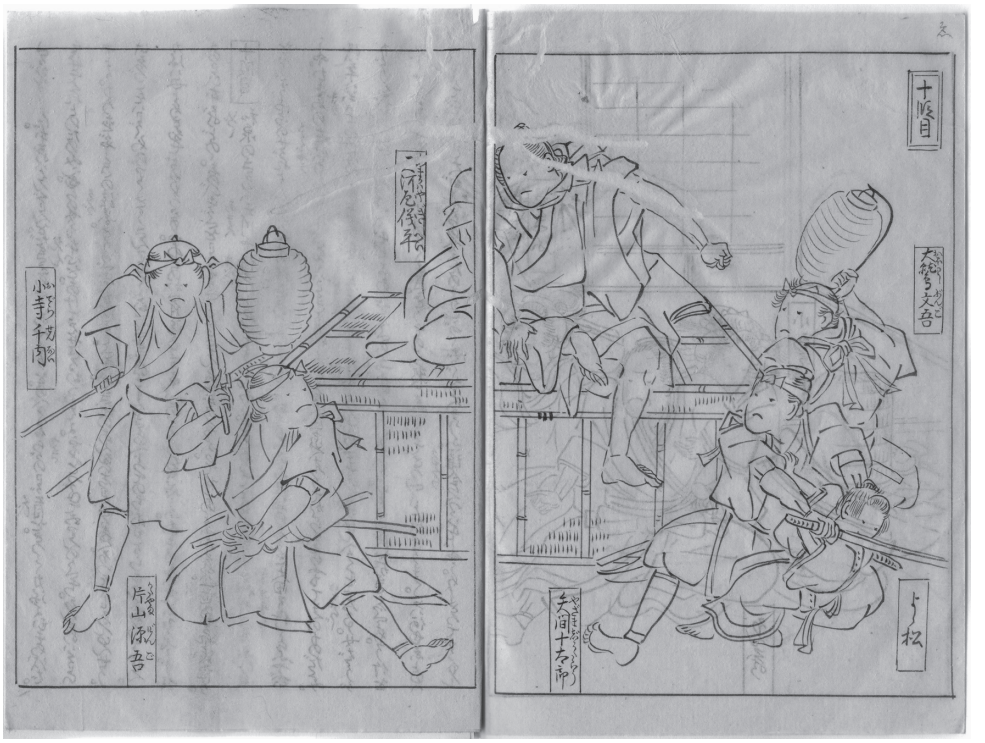

図 29

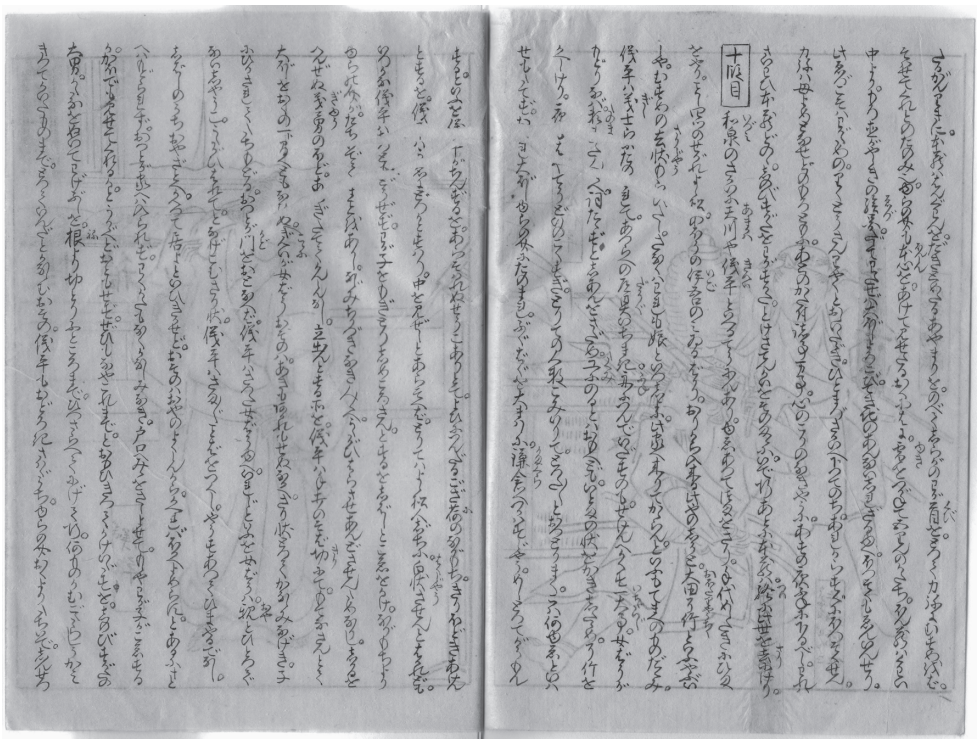

図 30

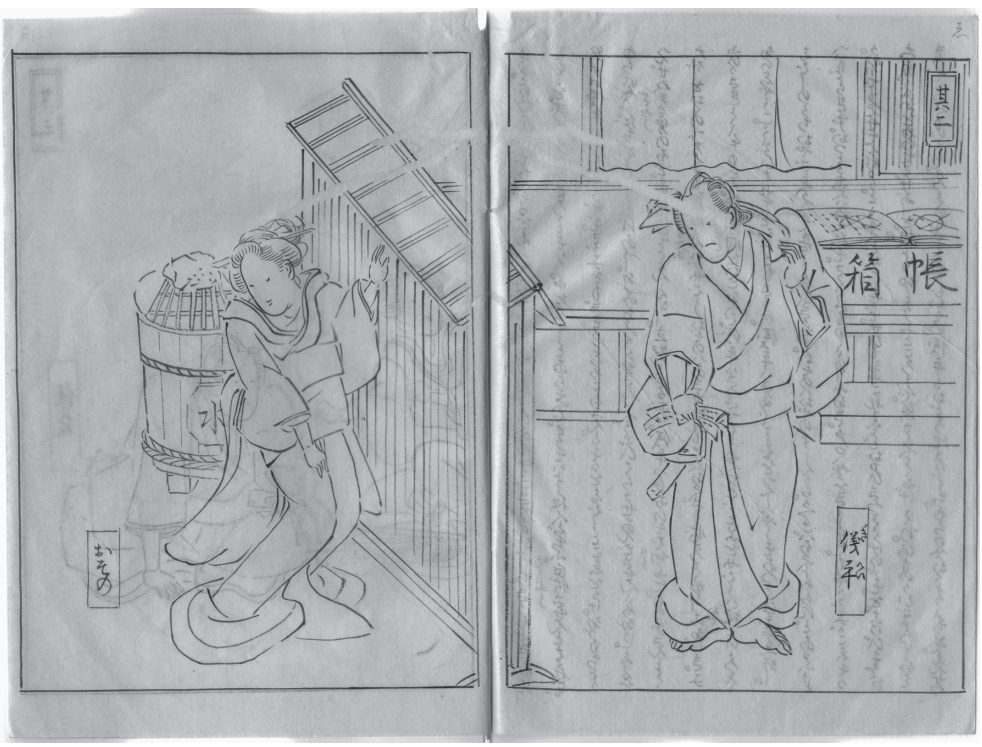

図 31

其六三
おちの
伴内
もち花火
ぐんご
十ちゃう

図 32

十一段目
ゆるされぬ
孫九郎
大ぜい力添
三るの師直
夫婦ぢたり
大星由良之介

図 33

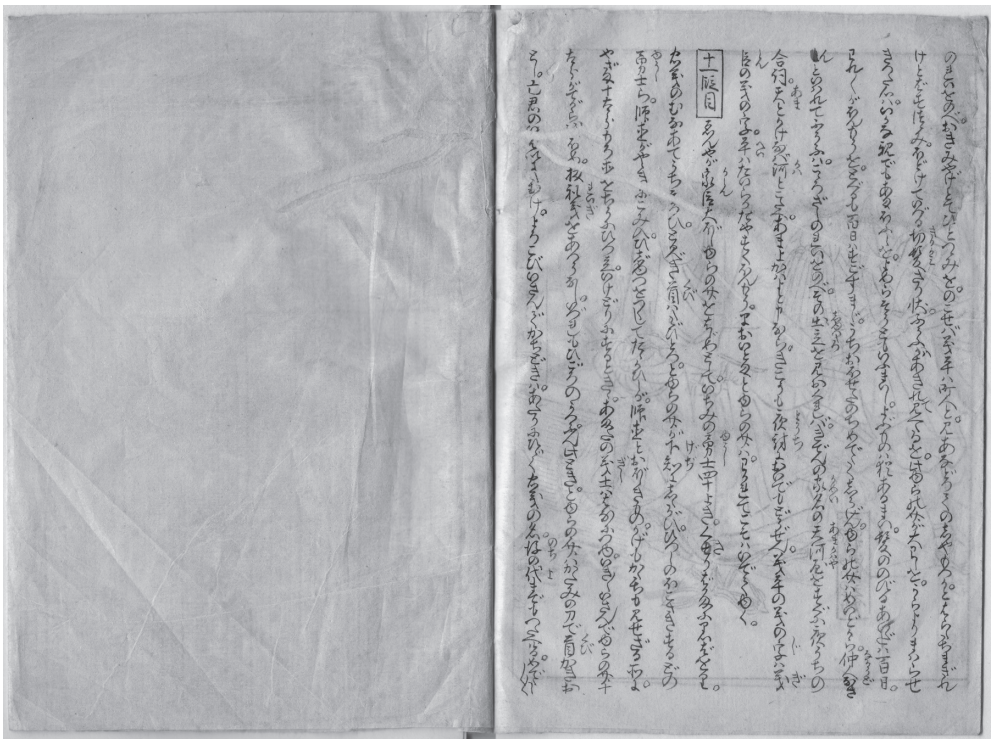

図 34

図 35